―花錦―

―第４号

目次

ふと思う　蜃気楼　…２
黒い森　萌季門℃莉亜　…３
リレー小説　一年生一同　…６
夢　紫雲英　…１１
キンモクセイ　モナカ　…１２
対岸まで　蒲公英　…１２
てきとーにシンコクに　ナナホシ　…１３
星屑落ちた湖は　蒲公英　…１９
君　蒲公英　…２０
トッペリ森の奥の花　蒲公英　…２１
ジュースとお菓子　蒲公英　…３６
ある少女の運命　蒲公英　…３７
きっとどこかにいるあなたへ　蒲公英　…３８
神様になった日　ナナホシ　…３９
紺色マント　蒲公英　…４７

ふと思う

蜃気楼

ふと思う
あの時は楽しかったと
今が辛い時　苦しい時　何も感じられない時

そう思う
あの時は何とない日常だったからこそ

黒い森

萌季門℃莉亜

黒い森の前に立っていた。心や光を吸い込む全くの暗闇である。でも、凍てつくように冷たいという訳ではない。全く色んなものを孕んだ、寒くて温かい奇妙な暗闇だった。

「あんたも来たのか」

聞き覚えのある声がした。暗闇の中で私は両腕を広げた。ざらざらとした硬い服の生地としっかりとした人間の肉が手のひらに当たった。彼はそこにいた。

「気がついたらここにいたの。」

暗闇ゆえに人影しか視認できないが、この声はよく見知った人物だった。昔付き合っていた田中。高校を卒業してから一度も会ってない。もう、二年になる。

「夢？」

「かもね。てか見ろよ。俺たち制服着てる。」

胸のあたりを触ると、セーラー服のスカーフがふんわりと風に靡くのを感じる。

「どうしよう。」

一応口には出したものの、お互いやるべき事は本能で分かっていただろう。

「森を、抜けよう。」

「大丈夫？」

「ここは夢なんだろ。なら、大丈夫だ。」

どちらとも、何を言うでもなく一歩踏み出した。

森の中は、生き物の体内みたいに生ぬるく湿っていたかと思うと、急にコンクリートの様に無機物的になったりした。ただひたすらに自分達の足音だけが響いたかと思うと、死ぬ直前の重傷者の呼吸音の様な音が聞こえてきたりした。

無言で歩いていると、彼が腕を伸ばした。手のひらが私の腕に当たり、そこから伝って私の手を探る。

「はぐれちゃまずいだろ。」

ああそうか、彼は怖がりだった。私は、昔彼に感じた愛おしさを思い出しながら、手を握ってやった。

沈黙が気まずかったのだろう。彼は口を開いた。

「学校楽しい？」

「うん、まあ……普通。そっちは？」

「まあ、普通に楽しい。ただ……コロナやし、一人暮らしがちょっと寂しい。」

違和感を感じた。彼はこんなに、感情を素直に表現する男だっただろうか。
「彼氏は？」
「出来てない。コロナだし。」
「だよな。」
昔の空気感が戻りつつあった。きっとお互いに、取り出し可能なところに感情が仕舞ってあったのだ。
「ねえ、」
「ん？」
「まだ生きてる意味だとか、愛ってなんだろうとか、そういうこと考えてる？」
彼はこういう哲学的な事を考えるのが好きな男だった。暇さえあれば、親しい者に自分の考えをぶちまけ、議論していた。今考えるとどういう高校生だよという感じだが。
「あんたはどう思う？」
「私は未だに、愛はセロトニンとかなんだとか、本能とか、そういう脳内物質とかが作り出したまやかしだと思ってる。生きてる意味なんてない。人間は動物なんだからいずれ死ぬだけ。強いていうなら生殖とか。」
彼はふっと笑った。昔の様な人をコケにする笑いではなく、暖かい自然な笑みだと想像がついた。以前なら、反論に反論を重ねていただろう。
「マジで変わらんじゃん、お前そんなんでなんで国語の成績いいんだよ。」
「ふふん」
彼は遠くを見た。（様な気がした）
「結局は、生きてる意味はあっても真面目に考えちゃダメなのかもしれない。」
「うんうん、それで。」
「そんな事考えない様に人は幸せになろうとするのかもしれない。」
「なるほど、じゃあ愛は？」
「昔はお互いに極限まで理解し合おうとする事かもしれないと思っていた、でも、今は理解しなくても、側にいる……みたいな感情とか関係のことかもしれない。」
「丸くなったね。」
「まあ、時間経ってるからな。」
私はため息をついた。きっともう、森は終わってしまう。
「ねえ、私寂しかった。」
「俺も」

「今度はまた、もっと色んな話をしよう」
彼の手をしっかりと掴んだ。意外と暖かくて、子供の様な体温だったことに気づいた。朝露を足に感じた。

「着いたら、一緒に美味しいものを食べよう。そして、色んな話をしよう。」

いつもの布団の上に横たわっていた。
起きようとしたら、スマホが鳴った。田中。
「おはよう」
「おはようございます。」
彼は惨めそうに言った。
「俺、死のうとしてたんだ。」
「うん。」
「留年した。」
「うん。」
彼はいつもの態度とはかけ離れた五歳児のような喋り方をした。
私は、意味もなくただ微笑んだ。
「今日、そっちに行くんだ。親に、説明しないと。」
「うん。」
「なんかもう、本当に分かんないんだ。」
私はこう言った。

一年生　リレー小説

1. モナカ

　久しぶりに来た祖母の家の前で「なんで古い家ってチャイムとか無いの？」とか言ってうじうじしてる私の横で
「おばぁちゃぁーん！！！久しぶり！！元気だった！！？ただいま！！」
妹は、私の戸惑いなんて関係なくガラガラガラと音をたてて扉を開ける。
「えっ。ちょっと待ってっ」
「お姉ちゃんは考え過ぎ！！早くおばあちゃんに会いたいじゃん！！」
　夏休みに入って四つ下の妹の茜《あかね》と祖母の家に帰省した。家の周りには田んぼが、奥には山があってここまで来る間に小動物に会ったりなんてした。いわゆる田舎。
「久しぶりだね。少しお顔が大人っぽくなった？遠いところまで二人で来てくれてありがとう。」
　一年ぶりのおばあちゃんは変わってなくて優しい笑顔で話しかけてくれる。長い白髪は頭の上でまとめられていて薄い藍色の着物もよく似合っている雰囲気のある人だ。
「おっ、お久しぶりです。あの、これ母からのお土産で……」
　ここからなんて話せばいいのだろうか。いつも言葉が出でこない。活発で行動力のある妹は本当に凄い。羨ましい。「あなたは真面目でいい子だよ。」なんて母は言ってくれるけど、それだけでこれから生きていけるのか？
　今日はバスと飛行機で移動したけど、きっと私一人じゃたどり着けなかっただろう。飛行機の搭乗口までに何回人と話さなくてはならないのだ。人が多いと緊張してしまって疲れてしまう。来年は大学受験があって将来のことを考えることが増えたけれど、この性格で何十年も生きるなんて正直生きづらさを感じている。
「近くの和菓子屋で買ったものなの！！美味しいから一緒にたべよ！」
「ありがとう。三人で食べましょうね。ほら、暑いから早く上がって」
　おばあちゃんに連れられて廊下を歩いていると去年と何か違うことに気づく。
「あれ……？ここって閉めてあったっけ……」
　去年来た時はここは縁側で外の池と庭が見れた気がするんだけ

ど……。今は木の扉で塞がれてしまっている。
「沙香《さやか》ちゃんよく気がついたね。明日と明後日に台風が来るのよ。ここには近づかない予報なんだけど。一応ね。」
「へぇ～！ここって閉めれたんだ！！ねぇ、ちょっと外見てみたい！！開けてもいい？？」
返事も聞かずに妹は扉を開け始めた。
「うっ、重い……よ、いしょ！」
扉は大きくて重いみたいだ。ガタガタと音をたてて扉を開けようとするが、力の弱い彼女で動かせたのはせいぜい二十センチくらいだろうか。
その二十センチの隙間から妹は真剣に外を眺めていた。
「どんな感じ？私にも見せて？」
そんなに真剣に何をみているのか気になった私は外を見てみることにした。

2. 紫雲英

隙間からはこじんまりとした池とその奥には青々とした木々が見えた。
去年来た時と変わらない景色だ。
ふと、妹が何を真剣に見ているのかが気になった。
「茜、何を真剣に見てるの？」
「うーん、木の奥に何か黒い陰みたいなのが見えた気がしたんだけど、気のせいだったみたい」
妹はそう言い居間にいるおばあちゃんのところに歩いていった。
私は妹が言った黒い陰が気になりもう一度隙間から外を覗いてみたが何処にも見当たらなかった。
「やっぱり茜の見間違いか」
「お姉ちゃん！ちょっと来てー！」
居間のほうから妹が私を呼ぶ声が聞こえた。
「はーい、今行くー！」
ガサッ
返事をすると同時に視界の影で何かが動いた気がした。
「あれ？」
再度外を見るが、特に何もない。
「おかしいな？」
「お姉ちゃん！はやくー！」
もう少し外を見てみたかったが、妹の呼ぶ声に急かされて木の扉を閉め、居間の方へ駆け足で向かう。
「あ、お姉ちゃん！見てみて！おばあちゃんが着せてくれたの！」

「わ！可愛い！！」
居間に行くと妹が白地に朝顔柄の浴衣を羽織っていた。
「沙香ちゃんと茜ちゃんに似合うと思って取っておいたの。来週は夏祭りがあるから、その時に着てくれればって思ったのよ。」
おばあちゃんは手に浴衣を持ちながら言った。
そう言えば、来週は夏祭りが行われるのだ。去年は台風の影響でお祭りが中止となり行けなかったため忘れていた。
「沙香ちゃんはどの浴衣が着たい？遠慮なく好きなのを選んでくれていいのよ。」
おばあちゃんは柔らかく微笑みながらいう。
床に置かれた数着の浴衣をみていると、紺色の生地に白と紅の椿の花の柄がついた少し大人っぽい浴衣が目に止まった。
「あの、この浴衣でもいいですか？」
「えぇ！もちろんいいわよ！試しに着てみましょうか。」
そう言いおばあちゃんは浴衣を着付けてくれた。
「わぁ！お姉ちゃん綺麗！！」
「よく似合ってるわ。その浴衣は貴方達のお母さんのものなのよ。」
「え、お母さんの？」
「ええ。夏になるといつもその浴衣を着て夏祭りに行ってたのよ。懐かしいわ。やっぱりあの子の娘ね、昔のお母さんに瓜二つだわ。」
「え、そうなんですか？」
「えぇ。あの子も真面目で大人しい性格の子だったから。」
「そうだったんだ……」
お母さんと私の性格が似ているなんて全然知らなかった。
「あら、もうこんな時間。喋り込んじゃったわね。お腹も空いただろうし、夕飯にしましょうか。」
気づいたら日が暮れだしていた。
その日は夕飯を食べ、お風呂に入ったあとそのまま妹と並んで寝てしまった。

3. 萌季門C莉亜

あんまり近づかないなんて予報だったくせに、思いのほか風は吹いて。
おばあちゃんの家に到着した次の日の夜、古い家はびっくりするくらいギシギシと揺れていた。
豪胆な性格の二人は
「古い家だけどしっかり造られているからね、安心していいのよ。」
「お姉ちゃん気にしすぎ！こんなんで家が崩れる訳じゃないでしょ！」

なんて言って二人ともすぐに寝てしまった。私だけは、慣れない家で台風を迎えるというイレギュラーな状況ですっかり目が冴えてしまっている。

……いいなあ、私も二人みたいに神経質じゃなかったらなあ。

その時だった。

雨戸に覆われた窓からでも分かる光、轟音、そして地響き。

雷だ。多分すごく近い、目の前かも？

流石に起きただろう、と思って隣で寝ている茜の方を見たが、ぐっすりと熟睡している。おばあちゃんが寝ている部屋の方からも、なんの物音もしない。

二人とも流石に肝が据わりすぎではないのか……？そんな事を考えて布団にまた潜り込む。早く寝てしまおう。

意識が現実と夢の狭間に潜り込んでいく。朦朧とした意識の中、やっと眠れそうだと思った。

こんこんこんこんこん！

「ん？」

一気に現実の世界へ引き戻される。雨戸を誰かが叩いている。

……雨戸？

私は飛び起きた。その間も音が鳴り止むことはない。体が恐怖と驚きで固まる。

こんな時も頼りになるはずの妹はぐっすりと眠っている。驚くほど。

なんで雨戸なんだろう。玄関に行けばいいのに。っていうかこんな夜に一体誰？

どうしよう。どうすればいいの？

固まったままその音を聞いていた。すると、その音には懇願が込められているような気がした。誰かを呼んでいるような、勇気を振り絞っているかのような、なんだか困っているような……。

私は勇気を振り絞った。よろけながらも立ち上がる。何故だか相手に敵意がないのが分かったし、それに、困っているのなら……助けてあげたい、そう思った。

木製の扉に力を込める。ガタゴトという盛大な音と共に扉が開いて、風と雨が入り込む。

風雨と暗闇の中必死に目を凝らす。目の前に小さな人影があった。子供？子供だ。男の子だ。うきわ？みたいなものを付けている。

「さ……幸子お姉ちゃん？」

それはお母さんの名前だ。なんでこんな小さな子がお母さんの名前を知っているんだろう。その前になぜこんな台風の夜に一人で……

「それは……私のお母さんの名前。それより……」
なんで一人でいるの？と続けようとした言葉は遂に発せられなかった。雷が遠くで光って、一瞬男の子の詳細な姿が浮かび上がる。
……男の子の頭には、立派な角があった。

4. 蜃気楼

状況が理解できず私は唖然とした。
「幸子お姉ちゃん？どうしたの……？」
その声ではっと我に返る。
「あなたは……何なの？」
男の子の表情が変わった。
「僕は奏鬼（そうき）だよ！お姉ちゃん、忘れちゃったの……？いつものとこに急に来なくなっちゃったから……僕は幸子お姉ちゃんが心配だったんだよ！？」
今にも涙がこぼれ落ちそうになりながら、奏鬼は私を見る。
「奏鬼くん。私は幸子じゃなくて紗香っていうんだ。幸子お姉ちゃんは私のお母さんかもしれない。」
「幸子お姉ちゃんは君のお母さん……？」

ゴゴ……ドカン！近くで雷が落ちたようで、急な光に視界が遮られた。そうだ台風……そう思いながら次に目を開けた時、もう男の子の姿は無かった。
「ほら二人とも起きて、朝よ！」
おばあちゃんの声で目が覚める。ぼーっとしながら、夜の出来事を思い出す。あの男の子は結局何者だったんだろう、なんで子供の頃のお母さんを知っているんだろう、台風の中小さい体で大丈夫だったのだろうか、色々考えてしまう。
「おーい、おねーちゃん。起きてー！今日はおばあちゃんとお出かけするんだから、早く着替えて！」
「ごめん、ごめん！すぐ着替える！」
おばあちゃん家にいる間は楽しまなきゃ。帰ったらお母さんに聞いてみよう……。
台風の夜に出会った、角の生えた男の子のこと。

夢

紫雲英

夢を見る

深い霧が立ち籠めるなかに
私はひとりポツンと佇んでいた

夢を見る

霧が晴れ
暖かい陽の光が目の前の道を照らしている

果てしなく続くその道を
貴方と並んで歩いている

夢を見た

暗闇の中を私はひとりで歩いている

寄り添ってくれていた貴方はもういない

遥か遠くにある一筋の光を目指して
私は孤独に歩き続ける

キンモクセイ

モナカ

緑の葉が茶色に変わる
柔らかったあの感触
触ればパリッと形を変える

ずっと耳に響いてた
ミンミンと、鳴く虫の声
今は違う声が聞こえてる

時間が経てば形が変わるものたち
私は何か変わっているかな
変わったものを思い浮かべる

あの子も何か変わってる
笑顔が増えた
大きな声が耳に響く
すれ違うとキンモクセイの匂いがする

対岸まで

蒲公英

空が映ったような青に
群れた桜が泳いでいる
素足をそっと　桜の舟に乗せて
そのまま歩いていきましょう

対岸は遠くない
桜に　波に任せて　ゆっくりと
小さなしぶき　スカートが濡れる
それでも止めないで
きっと対岸の地を踏めるから

耐えて耐えて耐えて
足元の桜は沈みはしない

てきとーにシンコクに

ナナホシ

夜になってしまう。さっきまで昼だったのに、もう夜が近づいているんだ。秋になったので最近は涼しくなってきた。夜は好きだが明日は来ないでほしい。かといって時が止まってしまうのもいやだ。矛盾した思考に体が軋みだした。受け入れるか、抗うか一択を選ばなければ体が分裂して裂けてしまう。

「明日は歯医者があるからいやだ……。」

言葉にするとどうでもよくなった。タンスを開けると折れ曲がった巨大な肉が入っていた。

「肉？これは……」

俺かな？？

……おれだった。おれがこっちを見てニチャァと笑った。

刹那。俺はトンネルの中にいた。ガンッガンッと音が響いている。パイプを殴っているような音。それは全身に響き、近くにも、遠くにも聞こえる。トンネル内はひんやりしており、半そでででは少し寒い。前が見えないので手を伸ばすと、ぬるりとした感覚があった。なんだか気持ち悪い。いやな予感がして、この予感は当たりだろうなという気がした。幸い手元も見えないくらい暗い。そのまま、ヌルヌルしたものを掴んで壁に塗り付けながら先へ進んだ。それにしても暗い。何も見えない真っ暗闇は頼るものがなく恐怖でしかない。顔を上に向けると、一層黒い物体がボンヤリと見えた。人だと思った。そして、これまで進んできた背後から、ごぉぉぉぉぉ……と何か黒いものが迫ってくるのを感じた。空気が一気に冷たくなる。後ろを見てはいけない。前に立つ人らしきものは俺の後ろに回り込み、ニゲロッと叫んだ。よく聞こえなかったけど。とにかく逃げようとすると足が動かない。沈んでしまう。自分が自分ではなくなる、その時の恐怖が俺の中に何かを刻んだ。

朝、つまり変な夢を見た翌朝。起きても一向に目が覚めず、まだ夢の延長なのではないかと思った。歯磨きをしても寝ぼけ眼で、歯医者で名前を呼ばれたときに、名前と実感が一致しない違和感を初めて感じた。夢のせい？いやいやいや……。

それから川沿いを散歩して帰ったけれど何も感じることはなく、ただむなしかった。帰ってカップ麺を食べ、何もすることがない夜を過ごした。何もしないことに耐えられなかった。何もしないと感受性が死んでいく。これまではどうやって生きていたんだろ

う。何かしないといけなかった。今夜は寝るまで筋トレをしよう。何が自分をそうさせるのか分からなかった。やりたくもない腹筋をして眠りに就いた。

ごおおおおおっと黒い塊がすごいスピードでこちらに向かってくる。そこで起きた。まだ夜中の二時半だ。なぜこんな夢を見てしまうのか？張り付いたシャツをパタパタさせてはがした。もう一度寝ると、テニスをしていた。誰か同い年くらいの人とテニスをして、その後誰かの後を付け始めた。夢の中だと自分がしていることに気付くのがワンテンポ遅れる。この子は何がしたくてあの人を追いかけてるんだろう？

「ね、何やってんの？」

「ん？あの人は、×な人」

その子が指さすほうを見ると、俺だった。

そのままその子は垣根を飛び出して、前を歩く俺に向かって正拳突きをした。俺が、派手に弾けた。

ぱぁぁぁんっという音とともに目が覚めた。もう半覚醒という実感はなく、この状態に慣れてきていた。

人と話していても話がわからない。一貫性がつかめない。文字も頭に入ってこない。先生が何を話しているのかわからない。そのまま昼休みになった。さすがにこれがいつまでも続くのはまずいと思う。明らかに変わった自己意識と、変わっていない周囲のギャップについていくのがやっとだった。

そんなこととは関係なく時間は過ぎてゆく。あれから四年が過ぎた。何も変わらず変化を感じず、だけど静かに変わっている。過ごしているときはただの延長線でも、振り返ると遠い所に来ている。もう戻れる余地はない。あのころの自分とは違う自分。質素な世界を見せてくる。

今日は星空がきれいな日だった。田舎に住んでいる利点はここだろう。というかここしかない。

家には家族が灯す明かりが見える。いつもの家に帰ってきた。玄関の扉を開ける。

「ただいま……。」

なぜか泣きたくなってしまう。どうして何も言葉にできないんだろう。生きているのに苦しさばかりが募る。リビングにそのまま行ける気分じゃなかった。家族とも距離を感じる。自分の部屋に行って大泣きした。言葉にできない。確かに何かを思っているはずで、でもそれが周りに伝えられない。口惜しさでいっぱいだったんだ。たまにギャン泣きすることで、感情を吐露することが

できた。

耐性が付いたのだと思う。自分が自分ではない感じが薄くなっていることに気付いた。たまに悪夢を連続して見たり、泣いてしまう日はあるけれど、それはそれで自分なりのコントロール法だと認識していた。

けれど日によっては認識能力が無に等しい。文字を読むこともできない。

「なぁタケミチ聞いてる？面白い動画あるんだけど」

あぁ聞いてる。見して～と言う。知らないアニメのワンシーンだったが、面白いらしい。面白さが分からずぎこちない返ししかできなかった。悔しさがたまるのを感じる。

「これ見るために頑張れるんよ、受験勉強。」

そんな俺には構わずえへへとかずは笑った。かずは気にせずマイペースに話を進めていくからありがたかった。そんなかずの笑う姿がどこか懐かしく、愛おしく思えてくる。

「がんばろなぁっ」

伸びをしながら二人で背中を叩き合った。

あれから五年後。俺はかずが見ていたアニメにハマり、両手にファンブックを抱えてにこにこだった。

「やっほーかずくん、お久しぶり。」

「久しぶり。楽しそうだねタケミチ。」

死にかけみたいな声を出すので心配になる。かずはやつれた様子で目に覇気がない。今日は話したいことがあるからとここに誘われた。

「今日どうしたの、話って。」

「うん、あのさ……」

「最近、俺ってここにいるのかなぁとか思っちゃうんだ。おかしいと思うけど、何も実感がわかないし、楽しくないんだ。」

「そうなの。」

「けど、その、高校の時だけど、タケミチがちょうどそんなこと言ってたような気がして話してみたかったんだ。」

苦しそうな顔をして話す様子に、こちらまで胸が苦しくなってしまう。

「実感が湧かないのはいつごろから？」

かずは俺がすんなり話を進めたので驚いている。俺もあの時同じような人がいたならどんなに救われたか知れない。

「ん、なんか起きたら世界が変わってた。小説っぽいけどこの表現が一番言い表せてると思う。一年くらいこんな感じ。」

ちょうど頼んでいたコーヒーが来た。
「ありがとうございます。……そうか、何かこう、夢とかは見なかった？あ、見たかもしれないか、起きた時ってことは。」
「夢と何か関係があるの？」
店ではジャズが鳴っているが話を聞かれないか気になる。ちらりと周りを見たが、客はそこまでいないので、少し気が緩む。
「俺もその状態になったことがあって、その直前に変な夢を見たんだよ。だから俺も起きた時から夢うつつな感じになった。夢は、全体的に暗闇にいて前がよく見えなくて、最終的に下に落ちていく感じだった。」
なるほどなぁ。ほぅ、という空気とともに、思念する空気に変わる。何を考えるわけでもなく考えるポーズをとる。
「あ、このチーズケーキ食べたい。」
おもむろに、かずがメニュー表を指した。見てみると、その隣にあるイチゴタルトが美味しそうだった。
「じゃあ俺はこれにしよ。呼ぶよ？すみませーん。」
はーいといってすぐに店員がメニューを聞きに来た。
「チーズケーキと、あとー……イチゴタルトをひとつずつお願いします。」
注文するのが苦手でいつもテンパった感じで頼んでしまう。店員さんが落ち着いて聞いてくれたので、今回は焦らずに注文できた。毎回ドキドキだ……。
「楽しみだなぁ。」
ふふ、とかずが笑う。ここに来て初めて、かずの面影を感じた。
「そういえばさ、中学のとき修学旅行で京都に行ったじゃん、あのとき一万もする扇子買ってたけどあれどうしてんの？」
思い出し笑いしながら聞いた。たしか二条城と書かれた扇子で、肩幅より小さいとは言っても二度見するくらいでかかった。帰りの荷物に入りきらず、ひとり扇子をもって新幹線に乗ってる写真があった気がする。
「あぁあれね、玄関に広げて飾ってるよ。」
かずも笑いながら言う。
「よく覚えてるなぁ。あれ修学旅行で買ったの今思い出した、毎日見てるのに。」
ガハガハ笑っていると目の前を腕が遮った。
「お待たせしました。チーズケーキと……」
かずが慎重にスペースを空けてぺこっとしながら皿を受け取る。
「イチゴタルトです。ごゆっくりどうぞ～。」
最初から俺のところには何もなかったため、イチゴタルトを簡

単に置くと、店員は一礼してキッチンのほうへ戻っていった。
　目の前のデザートに興奮がやまない俺たちは、ありがとうございまぁすといいながら、さっそくフォークがいいかなスプーンがいいかなと、取ったり戻したりしていた。
「スプーンだと余すことなく食べれるよね。」
　かずはチーズケーキなので崩さずに食べられるだろう。判断が早い。
「かずのは崩れにくいけど俺のはタルトだからなぁ、どちらにしろ崩れる運命……スプーンにしよ。」
「フォークだとタルトは切りやすいかもね。」
　うわ、悩ましい。
「んー、じゃあ先にフォークで食べた後に、崩れた分はスプーンで食べるか……。」
　かずはもう食べている。
「そうすれば？めっちゃうまいよ、濃厚。」
　俺へのフォローはそこそこに、かずの心はチーズケーキに夢中だった。そういうとこ変わってないな、お前。
フォークを手にした俺は、縁の固い部分だけまずはいただく。
「なんでタルト生地ってこんなにうまいんかなー。」
　顔が緩んでしまう。
「このチーズケーキも底のほうタルト生地でうまい。」
「ここの店主わかってる……。」
　真ん中のイチゴの部分を、またフォークで切って口へ運ぶ。なんと、イチゴに混ざってチーズケーキの断片がペーストされていた。
「おいっこれチーズケーキ入ってるぞ。」
　すると聞こえたのか店員が不安そうにこちらを振り返った。
「お得じゃんやったね」
　クレーム回避と思ったのか、安心した様子で元の位置につく店員。
　完食である。一人で食べると普通の間食だが、この満足感は人と食べないと味わえないだろうと思う。
「おいしかった……。」
「今度は向かいの新しいカフェ食べにいかないか？」
　食べた後に誘ってしまう。今からじゃなく今度のつもりで。
「えっ……今から？」
「次！次会ったとき！」
　言いながらまた会ってこうして食べれたらいいなと思う。
「あぁ次ね、分かった。俺も食べたいとこあるからその次そこ行こう。」

とんとん拍子に約束が約束を呼ぶ。
「食べたいとこってどこ？」
「焼肉」
「じゃあその次はすき焼きね」
らちが明かない。
「そういえば夢の話したけど何か引っかかることとかない？」
かずは一瞬何の話か分からない様子で首を傾げた。
「あぁ！夢ね、ゆめゆめ、うんうん。夢は覚えてないけど夢見が悪かった覚えはあるんだよなぁ。けどなんか、今はどうでもよくなっちゃったかも。」
美味しいものを食べて満足したのか、先ほどまでの切羽詰まった様子が一切ない。なんとも楽しげだ。
「そっか、それならよかった。なんかいい顔してるよ。」
「だろうね、気分いいから。……なんかさ、また一人になったら元に戻るんだろうけど、またこうやって楽しい時間を過ごしたいな。しんどい時間もあれば楽しい時間もあるって思うと、まだ頑張れそう。」
はにかんだようにかずは笑うと、そうじゃない？と眉を上げた。俺はわかる、と神妙にうなずいて見せる。
「俺も今はこうして同人誌のお世話になって楽しんでいるけど、いつそれが変わるかもわからないし、正直しんどいことの方が多いよ。けど今日は話せたしタルトうまくてよかった。」
うんうん、じゃあ外出ますかと会計して別れた。

星屑落ちた湖は

蒲公英

星屑落ちた湖は
月がない夜に　ぴかり　光る
光った瞬間願いなさい
星屑叶えてくれるから
みんなが知ってる　ウワサばなし

これに泣くのは星の屑　星になれない屑のぼく
自分の願いもまだなのに　人の願いを聞けるかい
空の仲間に言ってくれ
この落ちこぼれを蹴落とした
ご立派な星の皆様に

叫びは誰にも届かずに
願いがあふれた湖は
いつしか光が消えていた

君

例えば詩集を読むとする
それには「僕」と「君」の詩ばっかりで
きっと僕にもいるはずと
「君」という人がいるはずと
胸踊らせてみるけれど
隣には誰もいやしない

「僕」には「君」がいるなんて
誰かが傍にいるなんて
まるで決まっているかのように
たいていの人は言うけれど
「君」がいない人生は
虚しいものだと言うけれど

そりゃ虚しいさ　寂しいさ
だから僕は叫ぶのだ

蒲公英

ほら　あなた

そこのあなた
僕の「君」になってくれる気はないですか
ああ　そうですか

トッペリ森の奥の花

蒲公英

トッペリ森の奥深くには、この世で最も美しい花が咲いていると伝えられていた。しかし、どう美しい花なのかは誰も知らない。その花を手に入れようとトッペリ山に入っていった者たちは、誰一人として帰ってこなかったからだ。きっと花が盗まれないよう見張っている恐ろしい番人がいたり、罠が張ってあったりするのだと噂されていたのだった。

だから、花を手に入れることができた者は世界で一番の有名人・金持ちになれるだろうと人々は思っていた。誰もが知っているが誰も見たことがない、世界で一番美しい花。その姿を世間の人々に公表するのだ。名声は約束されていると言えよう。

恐ろしい噂をちっとも気にせず、野望を抱いてトッペリ森に入っていく者たちは後を絶たなかった。彼らは大抵意地の悪そうな、またはいかにも金に目がくらんだような卑しい顔をしていた。

しかし、その日トッペリ森に踏み入ろうとしていた青年は違った。軽く触れればすぐに折れてしまいそうなやせ細った身体に、穏やかさがにじみ出た顔つき。下がった眉は彼の恐怖心を表していた。とても強欲な人間には見えない。それもそのはず。彼は二十数年の人生で常に「お人よし」と評価されてきた人間であった。そんな彼が何故、生きて帰った者のいないこの森に入ろうとしているのだろうか。恐怖をごまかすかのように、彼はぶつぶつと呟いていた。

「僕にはもう、こうするしかないのだ。何としてでもあの花を手に入れて、社会の成功者になってやるのだ。今までのような生き方では、損をするだけなのだから」

呟いた声は森の中へ吸い込まれ、闇に溶けていく。青年はぞっとする気持ちを必死に抑えてトッペリ森へ踏み込んだ。

夜でもないのに森は暗い。育ちすぎた木々が陽の光を遮っているのだ。入ってすぐでこの暗さならば、花が咲いている場所はもっと暗いのだろう。

そんな場所に本当に花が咲くのだろうか。進んでも進んでも緑と闇しか見当たらない世界の中で青年はそんな疑問を抱いた。しかし、足は止めない。引き返すという選択肢は彼にはないのだ。それは強い意志だとか、信念だとかいうものとは少し違っていた。ヤケクソと言うのがふさわしかった。

とにかく彼は森の奥深くの花を求めて歩き続けた。ずっとずっと歩いて、気付くと三日が過ぎていた。もとより、数日で達成で

きるような目標ではないと思っていたので辛くはなかった。持参した食べ物もまだ残っている。しかし、青年は不安であった。森の中には動物もいなければ木の実もない。手持ちの食糧が尽きた後、補給の手立てがないのである。川が流れているから、水の心配はないのだが。

食料への不安と、三日も自分以外の動物を見かけていないことから来る寂しさに胸がつぶされそうになった彼は、そのあたりで一番大きな木の陰に腰を下ろした。

今日は目を覚ましてからまだ少ししか歩いていないのに、鉛がドッとのしかかって来たかのように身体が重かった。

「こんなところで挫けるものか。僕は必ず花を見つけて帰るのだ……」

俯いて呟く。どんな言葉もこの森では独り言にしかならない。虚しさを覚えた青年の耳に、鈴のような声が飛び込んできた。

「変なところで根気を見せる人ねぇ。手ぶらで帰ってもらわなければこっちが困ってしまうわ」

青年が顔を上げると、そこには絵本に描かれた天使のような恰好をした少女がふわふわと浮いていた。背丈はそこらの雑草と変わらず、背中には翼が生えていた。

「……天使？」

「いいえ、私はランルン。この森の妖精です」

ありきたりな童話にもそうそう出てこないようなおかしな名前だと青年は思った。妖精という存在に思わず立ち上がってしまいそうになったが、今の体力を考え、それは抑えた。

「その妖精が僕になんの用だ」

ランルンが何と答えるのか青年はある程度予想できていたが、とりあえず尋ねた。形式的な質問だった。

「さっきも言ったわ。あの花を取られては困るの。だから、帰ってくださいとお願いに来たのよ」

酷く面倒くさそうな、期待していなさそうな顔でランルンは答える。恐らく、何度も言った台詞なのだろう。帰ってこなかった野心家共は、青年と同じようにこれを聞いたに違いない。そして、青年と同じような言葉を返したのだろう。

「……悪いがお断りする。僕はどうしても花を手に入れ、富と名声を得なければならないのだ」

「あの花はこの森の生命そのものなの。あれが無ければ、この森はあっという間に枯れてしまう。私たちは生きていけない。だから、これ以上先に進まないでほしいの」

両手を組み、ランルンは懇願する。しかし、青年にはその鈴のような声がやけに淡々としているように聞こえた。

森がどうなろうか知ったことか。こんな妖精がどうなろうが、自分には関係ないはずだ。自分にそう言い聞かせた青年は体力の回復を待たずに立ち上がり、また歩き出した。
「待って！　先に進まないで。花を諦めて！」
後ろから翼の音がする。ランルンは青年が花を諦めるまでついてくるつもりらしかった。
気にするな、気にするな。僕は花の事だけを考えていればいい。花さえ手に入れられればそれでいいのだ。翼の音と鈴の声で意志が鈍らぬよう、胸の中で何度も繰り返しながら青年は歩き続けた。

＊＊＊

それからずっと青年は森の奥を目指して進んでいった。腕時計が何故か動かなくなり、太陽も見えないため何日立ったかは分からないが、相当の日数が経っているように感じた。青年の後ろにはランルンもいた。ランルは最初の方こそ、帰りなさい、諦めてとひたすら言っていたが今はそれも落ち着いている。休憩しようと青年が腰を下ろした時に軽く説得を始めるだけになっていた。
青年にとってランルンの存在が当たり前になってきていた頃、恐れていた事態が起こった。食糧が尽きてしまったのだ。最後の一食を口に入れる前に、青年はランルンに尋ねた。
「なあ、ランルン。この森には僕が食べられそうなものはないのか。これを食べてしまえば、おしまいなんだ。花を見つける前に飢え死にしてしまうのはごめんだ」
「花を諦めると言ってくれれば、食べられるものをお渡しするわ。勿論、そのあとは出て行ってもらうけれど」
予想した通りのそっけないランルンの答え。青年は少しの間ランルンを睨みつけ、最後の一食を半分だけ口にした。
「あら、いいの？」
そう言うランルンの声色は、さっきのそっけなさとは反対に愉快そうなものだった。しかし、青年にとっては不愉快な声でしかない。見下されているようにも、煽られているようにも聞こえた。
ああ、あの妖精に頼ろうと考えたのが馬鹿だったのだ。アイツに話しかけるのも、返事をするのももうやめよう。僕は一人だ。一人で進むのだ。そう決意する間にも彼の腹の虫は高らかに鳴いていた。
それからしばらく、二人は静かに進むだけだった。青年もランルンも何も言わない。二人の耳に聞こえるのは、風が緑を揺らす音と青年の足音、そして彼の腹の虫のみ。青年の空腹は、もう限界に近かった。しかし、半分となった食料を食べてしまう勇気も

なかった。何度中を覗いてみても、食料袋はほぼ空。補給の当てがないという事実が何よりも恐ろしかった。
いくら進んでも変わりのない緑の景色。背後に感じるランルンの気配。今までに感じたことのない程の空腹。全てが彼の不安を煽る。ランルンにああ言った手前、引き返すことはできない。しかしこのまま飢え死にまでの道をひたすら歩くだけというのも我慢ならない。一体どうなってしまうのだろう。せめて、せめて木の実の一つでも手に入れば、半分残した食料をためらいなく食べることができるだろうに。
一歩進むたび、青年の背は曲がっていく。十歩、二十歩と行くうちに、だんだん地面が顔に近づいてくる。そして、地面が顔に触れた瞬間に、青年はようやく自分が倒れたことを自覚した。
「ああ……」
叫びでも呻きでもない、情けない声が漏れる。もう、自分の身体には起き上がる力も残っていないように感じた。
僕はここで死んでしまうのか。僕を看取るのはあの憎たらしい妖精だけなのか、なんてことだ、なんて人生だ……。せめて、自分が死ぬ場所を目に焼き付けておこう。
倒れたまま何とか顔を上げ、辺りを見渡した青年の目に映るのはやはり木々ばかり。自然は嫌いではない。むしろ好きな方である。しかし、この森の緑はどうも気に食わない。これだけの木々があって、何故実をつけているものがないのだろう。それさえあれば、それさえあれば僕は……。
諦めと絶望と恨みの中で青年はゆっくりと意識を失いかける。しかし、その意識を呼び戻すものが彼の視界に飛び込んできた。
恨めしい緑色の中、たった一か所だけ赤く染まっていた。閉じかけた目を開け、よくよく見てみるとその赤色が木の実であることが分かった。
分かった瞬間、青年は飛び起き、木の実に向かって駆けだした。あれが食べられるか食べられないかはどうでもいい。食べなければどうせ死ぬのだ。食べて死ぬか、飢えて死ぬかの二択なら、僕は食べて死ぬことを選ぶ。腹が減った、腹が減った、早くあれを！
消耗しきっていたことも忘れ、必死で駆けた青年はすぐに木の下に到着した。見上げて確認する。緑に混じる赤。それは間違いなく木の実であった。青年の息は荒い。それは、単に駆けてきたからというだけではない。絶望的な空腹や先の見えない恐怖から解放されるという喜びがあまりにも大きいためであった。
そんな喜びの中、青年は自分の後ろにいたはずのランルンのことを思い出した。あの妖精め、僕に自力で食料を見つけ出されて、さぞ焦っているに違いない。どんな顔をしているか見てやろう。

意地の悪い考えで振り向いた青年の目に映ったのは、何の感情も出さずにこちらを見つめているランルンだった。
ランルンの表情は青年の期待を外れていた。しかし、代わりに思いがけないものが見つかって青年は目を見開いた。小さな兎が一匹、ランルンの傍を跳ねていたのだ。
真上になっている木の実と同じような赤い目、雪と見間違うかのような白い毛並み。青年は唾をのみ、跳ねる兎をしばらく見つめていた。
青年が兎を見つめる間、ランルンも青年をじっと見つめていた。兎が跳ねる音と、木々のゆれる音だけがしばらくそこに響いていた。
五分ほどすると青年は木に向き直り、幹に両手をかけて大きく揺らした。パラパラと木の実が落ちる。青年はかがんでそれらを一粒一粒丁寧に拾い集める。全て拾い上げた時、兎はどこかへ行ってしまっていた。
青年はランルンを見つめ、手の中の木の実を一粒口に運んだ。口の中で小さくはじけた木の実の味は、ブルーベリーに似ていた。

＊＊＊

木の実をいくつか食べてしまうと、青年は全身に力がみなぎってくるのを感じた。トッペリ森に入ってから不足していた栄養が、その木の実に全て詰まっているかのようだった。
空になりかけていた食料袋に木の実を詰め込み、青年はまた歩き出そうとした。すると、今まで黙っていたランルンが口を開いた。
「雨が降りそうよ」
「雨？」
青年はその場で上を見る。当然、一面暗い緑に覆われていて空模様は分からない。雲も見えない森の中で、どうしてそんなことが分かるというのか。そう思った矢先だった。
ドオっと激しい音がして、バケツをひっくり返したかのように勢いづいた雨が降ってきた。
「わっ……！」
ただ勢いが良いだけではない。当たると痛みを感じる程に大粒の雨である。頭上の木々も傘の役目はしてくれない。
「もう少し行くと洞窟があるわ。そこに行きましょう」
ランルンが言う。青年はそれを聞くとすぐにランルンを抱え、逃げるように走り出した。
「洞窟はこっちか！？」

とにかく、この雨をしのがなくては。
雨で視界もままならない中、ランルンの案内を頼りに青年は走る。何とか洞窟にたどりついたときには青年は川に落ちたようにずぶ濡れになっていた。
「散々な目にあった……」
「ごめんなさいね。たまにこんな雨が降るの」
すました顔で言うランルンは、青年の腕の中にいたためほんの少ししか濡れていない。
青年はシャツを脱ぎながら洞窟の外を見る。外は大雨に加えて風も強くなってきていて、とてもすぐには収まりそうになかった。今日はここで眠り、雨が止むのを待つ他なさそうである。
脱いだシャツを適当な場所に置くと、青年は座り込んだ。いつの間にか、ランルンも浮くのをやめて正面に座っていた。
妖精を視界に入れながら、洞窟の外の雨の音を聞きながら、青年はぼんやりと今までのことを思い返していた。他にすることもないのだ。また、洞窟に入ったときから妙な視線を感じていた。ずっとずっと奥の方からだ。その正体が分からなければ、避ける術もない。視線の不快感をごまかすために必死で頭を動かした。
森に入ってからもう何日過ぎたのだろう。あとどのくらいで花を探し出せるのだろう。振り返りながらぐるぐると、答えの出ない問いを繰り返す。目の前の妖精はきっとその答えを知っているのだろうと思うと、やるせなくもあった。
青年はずっと黙り込み、視線を気にしないようにひたすらぐるぐると考え続けた。軽く眠気を感じてきたとき、ランルンが唐突に口を開いた。
「あなたは、幻想世界というものに憧れがあるのね」
全く予想もしていなかったランルンの言葉に、それまで回転し続けていた青年の思考は一瞬だけ停止した。
少し間をおいて、返す。
「どういうことなんだ」
「だって、私を見てこれは夢や幻覚だと思わなかった人はあなたが初めてだったわ。今までの人たちはみんな、私の存在を疑ったのよ」
最初から私を信じてくれたのはあなただけね。
鈴のような声は軽く笑っていた。
「だから何だ？　それが君に関係あることなのか？」
青年は、一方的に自分のことを見透かされたことに対して恐怖といら立ちを感じていた。ランルンが言ったことは正しかったのだ。
彼は、童話や絵画や詩――特に「メルヘン」とつくようなもの

に強く惹かれる質であった。幼児趣味だとか何とか言われ、後ろ指さされるのも珍しいことではなかった。だから、仕事についてからはその趣味を隠していた。そして、この森に入ってからは趣味などに頭を回す余裕もなかった。ようするに青年はこの数年、幻想世界への憧れを新たな知人に知られるといったことはなかったのである。それは幻想世界の住人本人を目の前にしても徹底されているように思われたが、やはりそう上手くはいかなかったらしい。

そもそも、青年はトッペリ森に来る直前に、幻想世界への憧れを切り捨てたつもりであったのだ。切り捨てたはずのものを、まだ持っていると指摘されることは屈辱でもあった。

「私を否定するなんて発想も出てこなかったのね」

幻想世界の住人は愉快そうに笑った。そして、嬉しいわと付け加える。

「そんな人が森へ来るなんて初めてだもの。あなたがこの森のどこまで行けるのか、見たくなってしまったわ」

「だったらもう、僕を止めないのか？」

「さあ、どうかしら。あなたなら辿り着いてしまうかもしれないから……。本当に花が危なくなったら、私がどうするかは教えてあげない」

それはもう、ほとんど答えを言っているようなものだと青年は思った。進むだけ進ませて、最後の最後で邪魔をする気なのだ。

眉間にしわを寄せる青年をよそに、ランルンは楽しそうに続ける。

「代わりに一つ教えてあげるわね。あなた、あのとき兎さんを捕まえなくて正解だったわよ」

「どういうことだ。木の実を取るか、兎を取るかで何か変わったのか？　何かの試験だったとでもいうのか」

「ここはね、あの兎さんの親の巣なの」

笑顔を崩さず言ったランルンの言葉が洞窟に響く。と、同時に洞窟の奥、つまりさっきから感じていた視線と同じ方向から獣のうめき声のようなものが聞こえてきた。

青年が思わず洞窟の奥をのぞき込めば、食料袋に入っている木の実と同じ赤さの大きな大きな目が二つ、こちらを見つめているのが分かった。目しか見えなくともその威圧感は凄まじく、その兎がどれ程大きいのかが分かった。恐らく、クマの何倍もあるはずだ。

目の主がいるのはずっとずっと奥。自分はあの兎を食べなかった。だから大丈夫だろう。そうと分かっていても、青年の身体は震えた。チラリと洞窟の外を見るが、雨が止む気配はない。ここ

から出てあの目の主から逃れるという選択肢はなかった。
「あの大兎さんね、鼻がとってもいいのよ。自分の子どもの匂いなんて、ほんのちょっとでもすぐに嗅ぎつけてしまうわ」
ランルンの言葉を聞いた青年は、あのとき木の実を優先した自分にこれ以上ないというほどに感謝をした。
そして身体の震えが収まったころ、青年はようやく眠りにつくことができた。

＊＊＊

青年が目を覚ましたときには、雨は既に止んでいるようだった。奥にいる大兎は眠っているのか、昨晩のような視線は感じない。
「やっとお目覚めね。よく眠れた？」
寝起きの頭にランルンの高い声がよく響く。青年は軽く頭を押さえながら、食料袋の木の実を取り出して何粒か口に放り込むと、そそくさと洞窟から逃げだした。危害を加えられないとはいえ、恐ろしい大兎が住む洞窟にいるのはこれ以上耐えられなかった。逃げ出す青年の背を追って、呆れたように笑ってランルンも洞窟から出てきた。
雨は止んだとはいえ、変わらず森は暗い。青年は日の光がないことに慣れてしまったと思い込んでいたが、実際はそうではないらしかった。雨の後に太陽を見ることができないというのは、想像以上に寂しい。森を進みながら、青年はそう感じた。
森、雨、洞窟、そしてまた森。思えば、青年はずっと暗い場所にいた。自然は好きだが、明るい方がいい。日の光に照らされた緑とか、虹を映す水たまりとか、そういったものが好きだった。これだけ自然の物に囲まれているのに、それらが一つもない。今まで気にも留めなかったようなそんなことに対して、青年の気は酷く沈んだ。昨晩の緊張や恐怖が、尾を引いているのだろうか。
気が沈めば沈むほど、歩くのは速くなる。早く目的を達成して、ここから抜け出したいのだ。花を手にして森から出れば、日の光を浴びることができる。それだけではない、栄光も自分のものだ。今だけ、今だけ辛抱すればいい。辛抱する時間を縮めるには、速く歩けばいいのだ。速く進めばいいのだ。ザカザカザカと、彼はひたすら歩いた。
時折後ろを振り返れば、急に変わった彼のスピードにしっかりとついてきているランルンの姿がある。彼女は何も言わなかったが、青年が振り返るたびに軽く笑って見せた。
青年がどこまでたどり着けるのか見てみたいと、昨晩彼女は言った。しかし、止めないとは言わなかった。どこまで進めばラン

ルンが自分を止めに来るのか、それが分からないのも恐ろしかった。それでも、彼女の存在を確認することをやめることはできなかった。何故かは、青年自身にも分からない。

進みながら考える。昨晩のように今までのことを。それとは別に森のこと、ランルンのこと、花のこと、そして自分のことも。ぐるぐると考えた。この中のどれも、沈んだ気分を浮き上がらせてはくれなかった。

そして、森に入る前のこと、つまり青年が花を手に入れようと決意したときのことが頭をよぎった。

よくある話である。上司の失態が知らぬうちに部下である青年の失態になっていたという、珍しくもない話。青年の仕事ではなかった。世話になっている上司の多忙さがつい気になり、良かれと思って少しだけ手を貸した。青年の力添えは本当に小さなものだった。それこそ、仕事の大枠に影響を与えるようなものではなかった。

数日後、青年の知らないところで計画は破綻。もとは無関係だった青年が手を出したのが原因とされた。青年を原因とするのは無理があると、その仕事に関わった者の大半が思ったはずだが、彼をかばう声は聞こえてこなかった。仕事場を去るとき、一度も自分の方を見なかったあの上司の横顔は、今でも青年の脳裏に焼き付いている。

持ち前のお人よし性分が招いたことだった。上司に少しでも恩を返そうとしてやったことであった。それまでにもこういうことはあったのだ。お人よしを利用され、自分が損をすることは珍しくもなかった。積もりに積もったそれまでの不満やストレスといったものが、この大損で爆発した。

他人のことを考えるからこうなるのだ。お人よしなんていう性格だからこうなるのだ。優しさなんかがあるから、こうなるのだ。自分のことを、自分の利益を考えるのだ。最大の利益を得るにはどうすればいい？　そうだ、あのトッペリ森の……。

森に向かう少し前に青年は考えた。なぜ自分はあんなにお人よしだったのか。それは、きっと幻想世界への憧れのせいだ。メルヘンな、悪意のない優しさだけの世界に憧れていたからだ。捨てよう、捨ててしまえ。

そうして青年は憧れを捨て、トッペリ森に踏み入ることを決めたのだった。自暴自棄になっただけだと言えなくもないが。

軽く頭をよぎった過去は、数週間ほど前の出来事である。忘れるほどの時間は経っていない。何より青年は今もその出来事の渦中にいるのだ。花を見つけ出し、名声と利益を手に入れてからでないと、忌まわしい過去から抜けだしたことにはならないのだ。

気付けば、青年の頭の中はそれに支配された。森に入ることを決意した瞬間、上司の横顔、張り切って仕事をしていた自分、それらが何度も何度も頭の中を回る。

風が木々を揺らす音は仕事場のざわめきに聞こえ、木の幹には上司の顔が見えた。風が、木々が、草が、トッペリ森が青年の忌まわしい過去を再現しようとしているかのような、そんな錯覚に陥った。

いつの間にか動悸がする。暑くはないはずなのに汗が酷い。抜け出さなければ、ここから。早く、もっともっと奥へ、花のある場所まで行かなければ。

振り返ればランルンがいる。彼女に頼めば、この空間から逃がしてもらえる。花を諦めることと引き換えにして。一瞬だけ、そんな考えが浮かんだ。

「……」

明らかに様子のおかしい青年を見ても、ランルンは何も言わない。ただ、今までと変わらぬように着いてくるだけだ。この状態がずっと続いても、ランルンから声をかけてくることはないだろう。自分から助けを請わなければ、この苦しみからは逃げ出せないのである。

青年は、振り向きたくなるのをぐっとこらえる。そして動悸と異常な量の汗を連れて、また前へと足を運ぶ。

逃げてたまるか。花が無ければ、何も変わらない。何もなしに森から出て今までと変わらない人生を送るのと、このまま森で苦しみ続けるのと、同じことだ。苦しみは同じだ。ならば、せめて少しでも可能性のある方へ行ってやる。進んでやる。花に近づいてやる。

青年は駆けだす。弱っているためか歩いているのとほぼ変わらない速さだったが、青年は気にしなかった。ただひたすら、森に入った時と、今までと同じように前へ前へと進んでいった。

更に森は深くなる。森の暗さは変わらず、青年とランルンを包んでいた。

どれほど歩いただろうか。今まで以上に時間を忘れ、ひたすら進み続けた青年はようやく落ち着きを取り戻した。脳裏に浮かぶ過去の出来事や、妙な錯覚は消えうせていた。

「大丈夫？」

背後から聞こえるランルンの声。嫌味や皮肉めいた響きは一切ない。純粋に青年を心配しているようだった。青年は振り返って答える。

「大丈夫。ちょっと嫌なことを思い出しただけだ。君には迷惑だろうけど、まだ進めるよ」

そこまで言ったところで、周りの様子が少し変わったことに気付く。辺りがほんの少し、明るいのだ。周囲の木の数はそれまでと大きく変わったようには見えないため、陽が当たるようになったわけではない。前を向けばより明るい。光源は道の先のようだった。

青年は問う。

「ランルン、これは？」

「……まだ進めるんでしょう？」

行けば分かるわよ。

そう言っているように聞こえた。

＊＊＊

今までと同じように、また進む。進むほど光が近くなり、闇が減っていくことだけが今までと違っていた。

間違いない。きっとこの先に花がある。

目の前の光とさっきのランルンの言葉を根拠に、青年は確信していた。ランルンが自分を止めたがっているということも忘れて、光に向かって必死で駆けた。世界一美しい花がどんなものなのか、一秒でも早く確かめたかった。

そして、その時はやって来た。

視界が光でおおわれる。闇が一切ない、光だけの空間が久々だった青年は思わず両目を閉じた。

木々が揺れる音がする。それは今までと同じだ。しかし今は、それに加えて鳥の鳴き声や水が流れる音も聞こえた。

こわごわと目を開ければ、目の前には大きな湖が広がっていた。

「こんな場所が……！」

木の実のなった木にとまって鳴く小鳥たち、湖をのぞき込む兎や狐たち。そして、湖の手前でまぶしく光るものがあった。

目的の物は、きっとあれだ。

青年は意気揚々と駆け、光源に近づいていく。しかし、それがどんな形をしているのか見ることはできなかった。

それ自身が放っているあまりにも強い光に邪魔されて、その姿を確認することができないのだ。目を細めて、光に慣らしていく。茎があるのがうっすらと見えるが、それで精いっぱい。目的の花が目の前にあるというのに、つかめる距離にあるというのに、その美しさを見ることもできなかった。

「ランルン、これが花なのか」

困惑を隠しきれず、上ずった声で尋ねる。

「そうよ」

すました顔の妖精はあっさりと答えた。
「この光の中に、世界一美しいとされる花弁があるわ」
ランルンの説明を聞くと、青年は震える手を花にのばした。茎は見えているのだ。肝心な部分が光で見えなくとも、引っこ抜くことはできるはずだった。
しかし、それもできない。まぶしすぎて狙いが定まらないというわけではない。確かに茎を掴んだはずが、その感触がない。馬鹿な、と必死に目で確認すれば、青年の手はてんで見当違いの位置にあった。何度やっても、同じこと。花は動いていないはずだった。掴むのは容易なはずだった。それでも、青年の手は花に触れることができなかった。
受け入れられず、諦められず、青年は何度も手を伸ばす。その奮闘を後ろから見ていたランルンは、一つため息をついて語りかけた。
「あなたに花を取ることはできないわ。だって、ここまでたどり着けたんですもの」
青年が振り返ってランルンを見れば、その顔にはそれまで見たことがないほどに穏やかな表情が浮かんでいた。
「強欲な人はね、ここまでたどり着けないのよ。木の実じゃなくて、兎さんを食べてしまうから」

青年の脳裏に、洞窟の奥の赤い目が浮かぶ。ランルンは続ける。
「今までトッペリ森に入ってきた人間たちはみんな強欲だったわ。他人のことなんか考えもしないで、自分のことばかり」
でもあなたは違うわ。ランルンがまっすぐな目で青年を見つめる。青年は、その瞳に射抜かれたような気がした。
「あなたはまだ、迷っているでしょう。自分一人のためにこの大きな森を死なせてしまっていいのか、決断できないでいるでしょう」
「そんなはずはない！！」
青年は叫ぶ。自分はもう、他を気にするわけにはいかないのだ。この森も、目の前の妖精も、動物たちがどうなろうが関係ない。だから、花を取ることができるはずだ。自分にそう言い聞かせた。しかし、気にせずランルンは言う。
「少しでも森のことを気にしていれば、花に触れることはできないわ。ここではそういうことになっているの。」
あなたはまだ自分以外のことを気にかけているの。あなたは優しいのよ。どれだけ否定したって無駄よ。
鈴のような声が辺りに響く。
「木の実のことだけじゃないわ。鬱陶しかったはずの私を抱えて、雨の中を走ってくれたじゃないの。おかげで私は濡れなかった。

あなたは、ずっと優しかったわ」
　煽るのでもなく、見下すのでもなく、ただ淡々と事実を伝える
その声を青年は一切の抵抗なしに受け入れそうになる。
「僕は優しいのか。何も変わっていないというのか。損をするだけの、以前の自分のままだというのか」
　そう問い掛ける青年は、自分が涙を流していることに気付いていない。
　変わろうとした決意も、この森に入ったことも無駄だった。変われはしなかったし、花を手に入れられないことも、初めから決まっていたのだ。森に弄ばれただけで、得たものは何もなかった。幻想世界が実在すると分かったことも、今の青年にとっては何の得にもならない。それすら損なのだ。切り捨てたと思い込んだものを未だ抱え込んでいると指摘されてしまったのだから。知りたくもなかったことを知らされてしまったのだから。
　青年の目に映るのは、絶望一色だった。
「僕はやはり、損をする人間なのだな」
　うつろに呟いたその言葉は、ランルンに拾われた。
「損ばかりじゃないわ。あなたがここまで来れたのは、あなたが優しかったせいよ。ここにたどり着ける人なんて、滅多にいないのに」
　優しかったから得したのよ。
　言い聞かせるようにゆっくりと、妖精は言った。
　それを聞いていた青年は、ようやく自分が涙を流していることに気付く。ひどく汚れた服の袖で涙を無理やりにぬぐうと、声を荒げたまま返した。
「君が言いたいことわかる。しかし、しかし僕は得をした気にはなれない。僕はこの森で何を得ることができたのか、分からないのだ」
　聞き取るのが困難なほど、涙交じりの荒げた声。青年自身の耳にもハッキリとは届いていなかった。しかし、ランルンはそれさえも拾っていく。
「あなたは優しいだけじゃないのよ。何か目的があるのなら、そのために困難を乗り越えられる人なのよ。だって、過去の記憶から逃げずに、ここまで来たんだもの」
　青年はハッとした。確かにそうだった。目的自体は的外れなものであったが、それのために試練に耐えることができていた。ボロボロになった今の姿が、その証だった。
「目的を間違っただけよ。ここの花が容易に触れられるものであったなら、あなたは目的を達成できてたんだもの。乗り越える力は充分だわ」

「それが、ぼくの得たものか？」
青年の問いに、ランルンは首を横に振る。
「得た、というのはちょっと違ってるわね。優しさと同じで、元から持っていたの。気づいたのよ」
「気づいた……」
ランルンの言葉を繰り返した途端に、何かがフッと軽くなったような気がした。
優しさやお人好しなところだけが自分の美点、価値だと思っていたが、そうではなかったのだ。
唯一の価値を捨てる決意をしたから、それを補うためにもっと価値のある花を求めた。しかし、その必要はなかった。
「気づいたのも、得でしょう？」
思いもよらないことに気付いて立ち尽くす青年に、ランルンは優しく微笑んだ。
「分かった。分かったよ。僕が間違っていたことも。優しさを捨てる必要がなかったことも。乗り越える力があることも」
その二つを組み合わせれば、自分を押し殺さずにいられるだろうか。
そう尋ねれば、目の前の妖精は首を縦に振った。何度も、何度も。
「その二つがあるなら大丈夫よ。心の底では望んでいないような、悪いことをしなくたっていいのよ」
花を取らなくてもいいのよ。
そこまで聞いて青年はやっと、自分が花を取りたくないと思っていたことを受け入れられた。優しさゆえに損をするのは苦しいが、それを押し殺すのはもっと辛い。優しさゆえに得をした今、それを押し殺す理由はもうなかった。
「やはり、僕には似合わない。何かを犠牲にして自分だけ得をするようなことは」
そう口にした途端、花が輝きを増した。辺り一面が、花の光に包まれる。耐えきれずに掌で目を覆った瞬間、ランルンの叫びが聞こえた。
「もうお別れね！　大丈夫、見つけられたし、乗り越えられたんだもの！　この先もきっと何とかなるわ！」
その声に対して、何と返事をしたのか青年は覚えていない。ただ、ひたすらにすがすがしい気分だったことだけは覚えていた。

＊＊＊

目を覚ました青年が一番に見たものは、青空とハンカチのよう

な白い雲だった。森の入り口付近の草原に仰向けになって寝ていたのだ。森の中と同じように、青年の服はボロボロだった。夢ではなかった。
何日ぶりの空だろう。
立ち上がった青年は両手をいっぱいに広げ、サンサンと照らす太陽の光を全身に受けた。あの花の光に似ている、と感じながら。
トッペリ森の中で得たもの、気づいたもの、ランルからもらったもの。一つ一つ思い返す。
変えたかったこと、変えなくてもよかったこと、これから変えるべきこと。一つ一つ頭に浮かべる。
「家へ帰ろう。これからのことを考えなくては」
歩き出した青年の横顔に、暗いものは何もなかった。

＊＊＊

トッペリ森の奥深く、小さな妖精がふわりと浮かぶ。
「あんな人が来たの、何年ぶりかしら」
浮かぶ妖精は花を見る。
「ねえ、ここにたどり着けた人はまだ三人ね」
輝く花の隣に腰かけた妖精は、愛おしそうに問いかける。
「あと二人、あと二人の優しい人をここまで導けたら……前を向かせることができたら、本当に私との約束を守ってくれるの？」
問われた花は何も言わず、ただただ輝くだけだった。
「意地悪な人」
ぷいとそっぽを向いた妖精はまた浮かび上がって、輝く花から離れていった。次の来訪者を迎えるために。

ジュースとお菓子

蒲公英

君の好きなジュースを置いて
君の嫌いなお菓子を置いた
窓からやってくる君へのおもてなし
君は今日もお菓子を手に取る

僕に何も見せないで
僕に嘘を吐き続けて

僕の石は石だけど
君の石は雲で
いつまでたっても変わらない
知ってることも知ってるくせに

それでも僕は置き続ける
ジュースとお菓子をいつまでも
君がジュースを飲む日には

僕がお菓子を食べるから

僕の嫌いなジュースと
君の好きなお菓子
好きなほうを選んで食べて
笑い合う日はいつだろう

ある少女の運命

蒲公英

私に分かるはずがないと　風の音がバカにする
向こう岸で呼ぶ誰かの声を　滝の音が邪魔をする

顔は分からないのに　口の動きは見えて
「来てよ」と
どうせ聞こえはしないけど　私は返す
「行くわ」と

滝が怒り出す　風も騒ぎ出す
構うものかと水面に足を乗せた
水にも風にも　邪魔させるものか
水面を走る　私は舟

ああ近づく対岸の君　私に手を差し伸べて
つかめる　ほら　もう少し

バシャリ

最後に見えた　君の笑み
最後に聞こえた　水の泣く声

きっとどこかにいるあなたへ

蒲公英

あの日見た夢だとか
あの日歌った歌だとか
全部は覚えていないけど
小さく残ったものがある

見上げた空に　風の中に
花畑の中に　木のかげに
あなたがいないか探してしまう
そんなクセに気付いたのは
あなたから離れて　何年もたった頃でした

あの頃　あなたはいつもそこにいて
笑って　私たちを見つめていた
だけど　いつしか　私たちが
あなたを忘れていったのです

あなたの世界に行けたなら
私の世界へ来てくれたなら
あなたに会えたなら
あの頃抱いた叶わぬ願い
今の私も同じことを願っていると
やっと気づいたの

あなたはずっとそこにいて
今も私のそばにいて
私が振り返った時に　あの頃と同じ笑顔で
「おかえり」と言ってくれるのでしょうね

忘れたことを悔やむより
大人げないと照れるより
微笑み返して「ただいま」と
言えるような私でいたい

神様になった日

ナナホシ

ほかほかのご飯にのりをまぶし、卵を入れ、それをまとめてぐちゃっとかき混ぜる。時間がなかった。あと五分で家を出ないと学校に遅刻してしまう。かき混ぜたそれを勢いよく飲んで、リュックを背負う。

扉を開けると一面真っ白だった。さすが一月上旬、これからどんどん冷え込むだろう。滑らないようにしながら、健太は霜で濡れた前髪を気にしながら学校へ向かった。風に雪が舞うのを横目で見ながら校門へ続く白く凍ったアスファルトを走った。

チャイムの5分前につき安堵の息をつきながら席に座る。今日も教室は静かだ。職員室に日誌を取りに行き、また席に戻る。チャイムがなった。朝自習の始まりだ。健太は引き出しから漢字ドリルを取り出し、カリカリと書く。前の席の女子から手紙が回ってきた。隣のクラスの子からしい。クラスを挟んでメモが回ってきたことに若干ビビってしまう。開く

『好きです。お願いします。』

と書いてあったから、

『何が好きなんですか？』

と、もちろん僕のどこが好き的な意味で書いたのだが、返事をはぐらかしたと思われたらしい。それでもめげずに書いてよこしてくれた。

『健太君のことがです。』

特に僕のほうは好きというわけではないし、でも付き合えないほどいやというわけでもない。相手のことを知っていくのがお付き合いだ、と思う。

『いいよ。ありがとう。』

数分後、キャアと控えめに声がし、そんなに喜ばしいことなのか疑問に思った。

『放課後は部活があるから一緒に帰れません。でもこうしてお話ししてもいいですか？』

次の国語の授業、眠りかけていたころにメモが回ってきた。

『いいけど、何の部活入ってるの？』

書いた紙をまた回ってきた方向に回す。その往復にいる生徒も何故か微笑ましいような暖かいような、今まで感じたことのない空気の中にいる気がして気恥ずかしかった。相手の生徒のこともあまり知らない。というか誰なんだ。ちょっと待ってくれ、俺は

誰と付き合っているんだ。隣のクラスからというのが分かったのは、ベランダ伝いにひもを引いて、何か隣と交換してるなぁというのを遠目から見ていたからで、まさかそれが僕宛のラブレター(と呼ぶのも恥ずかしい)だとは思わないし、授業中だったし急だったし平静を装うのでいっぱいだし仕方ない……よな？それにしても今さら名前を聞くのも憚られる。

とか悶々としているところにまた手紙が来た。

『卓球部だよ～！』

よし！ と思った。これで何人かに絞れる！ 卓球部で隣のクラス、2年2組と言えば……誰だ？ 今まで周りに興味を持ってこなかった自分が恨めしい。だが、書くしかない。

『そっか～！ ところで何か好きな漫画とかある？』

書いてまた回す。……しまった！ よりによって漫画に限定して聞いてしまった！ だがまぁ、相手を知らない以上お互いさまだ。

『漫画好きなの？ ビンタービンターとか好きだよ～！』

ビンタービンター！ 俺の脳髄に衝撃が走る。ビンタービンターは、もうここ2年連載を休止している、長きに渡ってファンに愛され待望とされている漫画である。ちなみに僕も大好きである。

こ、これは話が合う予感しかしないぞ！ だが僕は紳士。焦らずいこう。

『気が合うね！ ビンタービンターといえばルキアとガンがカードバトルするシーンとかテンション上がったよ。』

頬が自然に緩んでしまう。彼女ってこんなに愛おしいのか……。

またメモ紙を渡す。メモは授業中ということもあり、授業ごとに2往復しかできない。この2往復がとても楽しみだった。授業もなぜか頭に入る。まさにアオハル。リアルに俺は充実している。

『わかる～！ なんかこの前知り合ったとは思えない（笑）ほかにもおすすめの漫画あったら教えてよ』

おぉ！？ 思った以上に好感触でうれしい……。

そうこうしているうちにもう帰る時刻である。

「よったもちゃん」

机の前に来たのは同じクラスの中山卓。いつも一緒に連れションする仲だ。

「なんか最近ご機嫌じゃない？ どうしたん。やっぱり噂の彼女？」

噂なんだ……。

「いやぁまぁそうだな……。」

「まっじで！！ なんだよほんとに付き合ってたのかよ～くそ～！」

間髪入れずシャウトする卓を見つつ、でもと言う。

「俺、彼女が誰なのか知んない。」

「は？　おま……ウソだろ……おま……。」
絶句である。
「え、お前知らない？俺の彼女……。」
「知るわけないだろ。」
噂になっている割に知られていないらしい。卓から、俺が誰かとメモのやり取りをしていること、そして俺がニヤつきながら返事を書いていることから相手は彼女だという憶測(事実)が出回っているらしいことを聞いた。まてよ？
「え？　じゃあ誰もメモの出どころ知らないのか？」
「らしい……。女子の何人かが出どころを突き止めようとしたけどルートが複雑で全然わからなくなったって。」
「そんな隠蔽工作みたいな……。」
唖然というか、茫然というか呆れというか……。あのメモそんな人の手に渡って俺のとこまで来てたのか……どうりで遅いはずだ。すっかり忘れていたが、卓球部に誰がいるのか聞いておこうと思った。
「卓ちゃん、女子卓球部の生徒知ってる？　彼女卓球部って言ってた。」
「まじ！？　有力情報！」
まじでメモしてやがる……。ジトっと見ると焦ったように話を戻す。
「女子卓球といえば、七人くらいいなかった？隣のクラスは……七瀬遥と谷間成美と美風恋と……あれ、三人かな？」
「めっちゃ可愛いじゃん……。」
「んね……。うらやましいよほんとに……。」
三人誰であってもかわいい。上玉だ。ただ俺の好みとしては谷間成美かな。巨乳だし。
「みんなかわいいけど～、俺の好みは谷間成美かも。」
あははと笑いながら卓が言う。閑話休題、帰るとするか。
「卓、俺頑張ってみようと思う。」
「がんばれ！　俺もアオハルしたーい！」
こいつと言葉選び合うの腹立つな……苦笑いしつつも教室を後にするのだった。

「じゃーなーたもつ！」
「おう！」
家の前で別れて玄関にカギを通す。家に入ってから、俺は有頂天にも大音量で曲を流し踊りながらシャワーを浴びる。しっとりしたラブソングを聴きながらディナーごち、切ないラブソングを聴きながら眠りにつく。ひとりだからこそできる天国！羞恥心な

んてこの家においては皆無だ！
　朝は快活な洋楽でロックに決める。ベットの上で勢いよく跳ね起き、髪をセットし鏡の前でポーズをとる。
　外に出ると雪景色だ。恋すると楽しい。憂鬱で寒い、現実だけだった世界もなんだか……詩的でファンタジーで……。これが世界が色づいたってことなのか？そんなことを考えながら、すっかり習慣化したメモ交換が始まる。
『今日も寒いね。もう進路決めた？』
『いやー、まだだよ。でも大学行こうとは思う。』
『そっかぁ、健太君頭いいもんね。勉強教えてほしいな(笑)　ねぇ、この問題分かる？100!の末尾の０の個数を求めよ。』
『［5分の100］＋［25分の100］＝20＋4＝24　よって24個』
『すごい！あってた！助かったよー。』
『自分で解きなさい(笑)そっちは進学考えてたりするの？』
『バイトかなぁ。全然、考えてない……。』
『これからまだ考える期間あるし、焦らなくていいと思うよ。』
『うん！』
『おなかすいたな……。』
『この前うどん券当たったからどんどん亭に食べに行ったんだよね～(笑)』
『まじか。天丼食べたくなってきた……。』
『ちょっと(笑)うどんって言いましたけど。』
『どんどんって聞いたらなんかさー(笑)』
『あぁー、それちょっとわかる。どんぶりといえばさぁ……』
　何も進展はなく、横ばいの幸福な時間。でもそれは贅沢な退屈でもあり、俺はたぶん、欲を出す時を見計らっていたんじゃないかと思う。
『そうそう(笑)ところでさ、会って話しない？』
　その日は返ってこなかった。

「よったもちゃん。沈んでどしたの。」
　ポンと肩をたたかれる。あのメモから二日目。今日も五限目に差し掛かっている。僕は気力を失い後悔していた。昨日の自分の失態に、そしてあのメモが相手にとってどんなものであったのか？客観的に考える余裕もなかった。そうだ、卓に……ちらっと卓の屈託ない顔を見る。
「ん？どしたん。」
　だめそうだ……。
「ちょっ人の顔見てため息つかないでくれませんかね！？　力になりますよぉ！？」

「卓……昨日俺メモに会って話さないかって書いたんだ。そしたらそれから今まで返ってこない……。」
「なんじゃぁそりゃぁ……。てかさ、もう女子三人に絞れてるなら当たって砕けろ聞いてみりゃいいじゃん。」
ほ！
「なるほど！！ お？」
そんな度胸ない！ というか名乗って来いよ！ 俺から聞かなきゃダメ！？
ポンと肩に手が置かれる。
「まずは谷間だ。谷間からやれ。」
「言い方！？」

計画はその日のうちに実行された。まず谷間を廊下に呼び出す。ここはだいぶ迷ったのだが、回りくどく聞くよりストレートに、
「俺とメモ交換してるのって谷間か？」
とまぁ、こんな感じで順繰りに三人に聞いた。が、三人とも神妙な顔をして、なぜ私という顔で……。
「撃沈だな……。」
隣で慰める言葉もない卓が慰めてくれる。
「俺、誰と付き合ってんの……。」

顔を覆う一方で、予想してたことでもある気がしていた。三人の誰かであったほうがショックだったかもしれないくらいだ。
「健太さぁ、そのうち分かるんじゃん？ 気長に待とうぜ。」
「待つの苦手だ……。」
「あぁ～……あ、逆だよ！」
卓がひらめいた！ というように目を見開いて言った。
「[誰か]が問題じゃない。メモ交換楽しいんだろ？ ならそれでいいじゃん。メモの中の相手は好き。会ったら分からん。今はそれでいいんじゃ？」
当たり前っぽいこと言ってるようで盲点だった。なんでこいつには彼女できないんだろう。
「たしかに！ 俺、また何気なくメモ交換始めるよ。」
「ちなみに自分から送ったことは？」
「あっても返事返ってくるのはあっちからの時だけだった。」
「なんじゃそら。まあ、がんばれ。」
チャイムが鳴った。心強い友を背に、俺はメモを書く。
『今日も部活行くの？』
これでいいかな。何気ない会話じゃないか？回してみる。しばらくすると、
『いいよ、会おっか？』

妙に整った、書き直したような字だった。いつも一方通行なメモ用紙。終わりを匂わせるその字は、あまりにもメモ交換の多福感に対して冷ややかだった。
『どこで会う？』
『体育館来て。卓球するとこの下。明日の3時に待ってるね。』
体育館を入って右、階段を上った階に卓球台が並ぶスペースが広くとられている。卓球スペースから体育館が見渡せる吹き抜けだ。
明日会える。ここ数日がドラマのように過ぎていく。高鳴る胸をよそに不安が胸を締め付ける。そわそわしながら眠りについた。

翌日、ドキドキしながら体育館に行くと、小柄なかわいい女の子がいた。うちの冬服を着ているが顔を知らない。髪は肩くらいの黒髪で、冬の湿り気を含ませしっとりと天使の輪ができている。長いまつげが、窓から差し込むステンドグラスの影を頬に落としている。
「お待たせ……待った？」
「全然。今来たよ。」
女の子は、手すりからひょいっと飛び降りると、
「初めまして。満永凛乃です。これから付き合ってください。」
「初めまして……？ う、うん。」
流されてしまう。時間がないかのように急かされるままに、教室のある棟の階段を登る登る。
「こんな階段登ったことないんだけど、どこ行ってるの？」
「ちょっとね」
少しいたずらっぽく笑いながら、アルミニウムのドアを開ける。そこは雪景色が見渡せる屋上だった。
「わ……。」
「びっくりした？ ごめんね、連れてきたくて。」
「これ見せたかったの？」
「そう。私ここ好きで、いつもここいるんだ。だれか連れてきたの初めてだよ。」
そう言うと僕の手を取り、降ってくる雪に足を預けて跳ねた。彼女の手はすべすべしており、粉雪をまぶしたようなきめの細かい肌触りだった。栗茶に透ける髪と白いうなじに目を奪われながら、僕らは空にいた。空中を飛んで、町を見下ろして、散歩をするように、雪を足先ではじきながら進んでいく。目の前には僕の手を引く凛乃。その背後には白い雪が灰色の空にパラパラ舞い、目下には広がる街が見える。ひび割れみたいに走るいくつもの線がどんどん細かになっていく。

「ねえ、見ててね。」
そう言うと、凛乃は一旦くるりと町のほうを向くと、繋いでいないほうの腕を前に突き出した。腕がパカっと割れ、そこから機械でできた骨らしきものが出てきた。否、銃だった。ひゅーーん……っ。風を切る音だけがして、爆発音が轟いた。視界が揺れた。僕らが揺れたのか、見えるもの自体が揺れたのかわからない。頭にも震えが伝わり体が風に軋んだ。煙で地面が見えない。僕たちは、高見の見物というようにただ事を見守っていた。と言っても、僕はなすすべなく放心していたのだけど。映画ってリアルに忠実に作られてたんだな、とどことなく客観視し、昔見たＳＦ映画と光景が一致した。僕の隣で彼女は興味なさげな目で街が燃える様子を見ていた。煙が引くと、赤茶色のドロドロ焼けただれた皮膚のような地平線が出てきた。
「え？ 何したの？なんで。」
やっと発した声はこれだけだった。いまだに白昼夢だ。
「望んでなかった？世界が終わったらなぁって。あれ？違ったかな？」
「はぁ？ 何言ってんの……。」
凛乃は困った顔をし、僕の顔をのぞき込んでくる。
「そっか……ごめん、私は健太君の強い願いから生まれたの。健太君が過去に望んだから、こうなったの。」
そう言って下の惨状を見やる。
「僕のせい？」
「いや……なるべくしてなっただけだよ。」
そういえば、むしゃくしゃしたときや落ち込んだ時、地球もろとも消えたいと夢想したことがあった。まさに今見た惨劇ではなかったか？
「たしかにそういうこと思った時もあったよ。でもこんなシナリオじゃない！ それに、君と知り合ってからはそんなこと欠片も望まなかったよ！ もしかして、君も僕が望んだから……？」
「そうだよ？ 健太君の願いが次から次に、時間差で回収されてってるんだね。」
「だからって、今じゃないよ……。僕どうしたらいいの？」
「うーん、健太君ねぇ、たぶん不死身も願っちゃってるよね……。」
嘘だろ、おれ。
「だから、また一から創造だね、神になりたいって願いも流れ的に叶ってるね？ ……あ、でも、この流れを健太君が知らないなら、本当の意味での神様じゃないよね。神様の計らいってすごいねぇ。」
僕を置いてけぼりにして、僕の願いを叶える神とやらを賛美している。

『好きです。お願いします。』

「元通りに戻りたいって願ったら、もとに戻るの？」
首を振る凛乃。いやな空気が僕らを包む。
「時間を戻すことはできないんだよ……。だから、また元の世界がこれから創造されますようにと、祈って待つしかないね。これまで元の世界にかかった分だけ祈り続けないといけない。健太君は、神様ではないけど願えば叶えてもらえるんだから。時間の理とか、制限はあるけどね。」
意識が遠くなった。絶望で何も頭に入ってこない。これから何年？ 今は紀元前？ 紀元後？自分が嫌だ。こんな事、望まなければ普段通りに過ごせたのに。どうせ願うなら、普通にもっといいことがあっただろ……。戻ってくれ！ もっと良いことを望むから、何でもするから、時間、戻ってくれ！！

「はっ！」
机から勢い良く飛び起きた。
「なんだ……寝落ちか……。」
卓が遠くから笑っている。それに唇を尖らすと、窘める素振りを見せる。
そんな俺の机にメモが回ってきた。

紺色マント

蒲公英

遊園地とかデパートで、風船を貰う。そうやって手に入れた大きな宝物は、ちょっと手の力を緩めればあっという間になくなってしまう。なくしたその瞬間も場所もはっきりと覚えているのに、どうしたってそれをもう一度手にすることはできない。けれど、クレヨンで描いた太陽と同じ色をした宝物が青い空へ飛んでいくのを見ながら、五歳の俺はいつまでもいつまでも短い腕を伸ばしていた。

そしてそれが視界から消えた時、「どうしようもないこと」の存在を思い知らされた俺は、大声をあげて泣いていた。

＊＊＊

うるさい蝉の声に混ざって、違う声が聞こえる。部活後の体はだるいし、手に持ったレジ袋の中にある二本のアイスが溶けるのも嫌だったから無視しようかとも思ったけれど、その声に聞き覚えがあることに気付いて足を止めた。子どもの泣く声――隣の家の亮だ。

辺りを見渡すと、少し先にある公園の入り口付近で顔をくしゃくしゃにしている七歳くらいの子どもがいた。間違いない、亮だ。

「亮、どうしたんだよ」

そう声をかけると亮は鼻水をズズッとすすり、俺の顔を見上げる。

「誠兄ちゃん……あれ、あれ……」

そう言いながら亮が指さした先は空。黄色い風船がふわふわと飛んでいた。

「飛ばしちゃったのか？」

「うん、昨日デパートで貰ったの。皆に見せようと思って持ってきたらぁ……」

また、うわああと大声で泣き出す。かと思えば、次にとんでもないことを言い出した。

「誠兄ちゃん、取ってえ……」

「ええっ……」

いくらなんでもそれは無理だ。風船はもう豆粒くらいの大きさになっている。どんどん離れていく風船は、手を伸ばしてもジャンプしても、つかむことはできない。

「亮、無理だって。木に引っかかったとかならともかく、あんな

に高いんじゃ俺でも届かないよ。空でも飛べればいいんだろうけどさあ」
何とか泣き止ませようと冗談を言ってみたけれど、こんなんじゃ笑えない。自分でも分かる。むしろ逆効果だったらしく、俺を見上げる亮の目にはますます涙が溜まってきた。泣かれたってどうしようもないんだ、仕方ないじゃないか。
もう一度空を見上げる。更に小さくなった風船は俺たちのことを気にも留めず、気持ちよさそうに上へ上へと昇っていく。あの時と同じだ。ほら、またどんどん大きくなっていく。どんどんどんどん……。
え？　大きくなってる？
「誠兄ちゃん、風船が……！」
数分前とは逆にどんどん近づいてくる風船を亮が指さす。正確に言うと、近づいてきているのは風船だけじゃない。黄色い風船の紐をつかんでいる誰かがいる。空を、飛んでいる？　そして俺たちのところへ向かって、下りてくる。何かがひらひらとなびいている。あれは、何だ？　誰だ？
困惑したまま上を向く俺たちに向かって、そいつが笑いかけた。いつの間にか、表情がはっきり見えるくらい下まで来ている。優しい顔をした、中学生くらいの男。ひらひらとなびくのは、背中の紺色のマントだ。マントとその下に着ている学ランが全くあっていなくて、怪しい。
「この風船は君のだね？」
マントの男が笑ったまま、こちらに話しかける。そしてトッと足音を立てて地面に着地すると、右手に持っていた風船を亮に差し出した。
亮がポケーッとした顔で風船を受け取る。多分、俺も同じような顔をしてるんだと思う。左手で右手をつねると、しっかり痛い。夢を見ているわけではないらしい。
「マントのお兄ちゃん、あ、ありがとう」
「どういたしまして。僕、紺色マントって言うんだ。また風船を飛ばしちゃったときは、僕に任せて。それが僕の仕事だからさ」
でも飛ばさないように気を付けないといけないよ、と付け加えて、紺色マントと名乗った男はふわりと浮いた。そしてちらりと俺の方を見て微笑む。
紺色マントはそのままこっちに向かって手を振り、またゆっくりと空を飛んでいった。
夢じゃないのはさっき分かった。でもあまりに突然、何でもないような顔をして現れて去っていった空飛ぶ人間を受け入れられるまで数分間、俺と亮はその場に立ち尽くしていた。勿論、亮は

風船をしっかり握ったまま。

＊＊＊

しばらく呆然とした後、亮を家まで送って俺も家に戻った。結局アイスは二本とも溶けてしまったが、それを残念がっている場合じゃなかった。

「誠、部活から帰って来たなら早くシャワー浴びろよ。汗すごいぞ」

帰宅して早々部屋でスマホを弄りだす俺に、親父が声をかける。でも、今はそれどころじゃない。さっきの紺色マントのことを調べないと。空を飛ぶ人間なんて話題になってないはずがない。しかも子どもが飛ばした風船を届けるのが仕事だと言っていたから、目撃した人は多いはずだ。検索すれば絶対に出てくるだろう。

「紺色マント　風船」「風船　マントの男」「風船　ヒーロー」「学生服　マント」連想できる限りのワードを並べ立てて検索していく。あれも違う、これも違う。似ているけどこれは絵本の話だ、今度はアニメ、違う、違う、違う……。

「誠、夕飯だってよ」

それらしい情報を見つけるよりも、親父が俺を夕飯に誘いに来る方が早かった。ハッとしてスマホから顔をそらすと、部屋が暗い。もう夜になってたのか……。シャワーも浴びずにずっと部屋にこもっていたから汗の匂いが酷い。まあ食べてから風呂に入ればいいやとリビングに向かうと、臭いから先に風呂に入って来いと家族全員から避難殺到。でも冷めた夕飯を食べるのは嫌だと必死に主張して、さっさと食べて風呂に行くことを約束してようやく椅子に座れた。メニューはハンバーグ。いつもならソースの匂いが部屋に漂うのに、今日は俺の匂いでかき消されている。暫く夢中で食べていると、親父が会話を始めた。

「お前帰ってきてからずっと部屋で何してたんだ」

「ちょっと調べものしてただけだって」

「アンタがそんなに熱中するなんて珍しいんじゃない？　部活にもそんなに身を入れないくせに……」

母さんが口をはさんでくる。いつもより声が低い。理由は知らないけれど、機嫌が悪いみたいだ。母さんの機嫌が悪い時は、いつも俺に嫌みが飛んでくる。

「お母さん、そんな言い方ないでしょ」

妹がなだめてくれるが、あまり効果がないみたいだ。

「今よりも中学の時の方が頑張ってたように見えるわよ。あんまり上手くならないみたいだし。それに比べてほら、同じクラスの

高山健人くんなんかはもうレギュラーになるって噂じゃない」
「健人くんは中学でも天才だって言われてたじゃないか。まだ一年生なんだから、誠にレギュラーは早いだろ」
「でもねえ、お父さん。部費も出してるのに……」
「もう俺のことは良いだろ？　ご馳走様！　臭くてごめん！」
せっかくのハンバーグも、こんな会話の中じゃ味がしない。さっさと皿を台所へもっていくと、家族と目を合わせずに風呂へ向かった。母さんの機嫌が悪い時にこの匂いは失敗だったな……。とりあえず、早く匂いを落としてしまおう。それからまた、紺色マントのことを調べるんだ。

＊＊＊

それから数日、紺色マントのことを調べる日々が続いているが、未だに何の情報もつかめていない。紺色マントのことを調べて、世間に広めようとかそういうわけじゃない。ただ気になるだけだ。どうして飛べるのかとか、どこから来たのかとか、疑問は尽きない。おかげで寝不足だし、部活にも身が入らない。どんなことでも良いから早く情報を見つけないと、近いうちに身体を壊してしまう。

今日も寝不足の頭で、今晩はどんなキーワードで検索しようか考えながら授業を受ける。日本史や数学なら居眠りができるが、体育だとそうもいかない。体育座りで先生の話を聞くときはあくびを隠すのにも一苦労だ。
「……というわけで、予告したとおり今日から夏休みまでの数回はテニスをやる。ラケットとボールは学校のを使うから、次回からは準備運動の後に道具を取りに来るように」
部活で毎日のようにやっているから分かるが、この暑さの中外でテニスをするのは相当辛い。もう少し考えて欲しいな……。そもそも部活でもないのにテニスしないといけないなんて。
頭の中で愚痴を並べていると、先生がこう言った。
「とりあえず、打ち方のお手本を見せたいんだが、誰かできるやつはいるか？　テニス部はいたかな……」
身体がピクリと反応する。二クラス合同の体育。けれど、テニス部員は俺のクラスに二人だけ。
「先生、オレやります」
さっと手を挙げたのは、俺じゃなくて健人だった。
「高山か、ありがとう。じゃあ先生と軽くラリーしよう。みんな、コートから出て先生たちの動きを見てろよー」
はーい、と揃っていない返事をして、みんな移動を始める。説

明の時点で暑さにやられている生徒が多いのか、コートから全員が出るまでには少し時間がかかった。何となくだらだらした雰囲気だ。

それが、ラリーが始まった瞬間に変わった。

パコン、パコンとボールの音がコートに響く。ラリーが始まるまでヒソヒソ聞こえていた話し声も全くない。全員、健人に見入っていたからだ。

軽いお手本というだけなのに健人は真剣で、体の動かし方もボールを追う目線も、部活の時と何も変わらなかった。手を抜こうとか、気楽にやろうとか、そういうのが感じられない。先生もラリーの相手をしながら少し驚いたみたいだ。はじめは単調だったボールの軌道に先生が変化をつけ始めると、健人もそれを追う。健人の打つボールにも変化が出始める。パコン、パコン、パコン……。コートの外にいる全員が、ただひたすらボールを追いかけて顔を左右に動かす。

そのラリーの間だけ、試合のような緊張感が走っていた。

「よし、もういいぞ。ありがとう」

先生の声に、全員がハッとする。

「いやあ、上手いなあ。さすがテニス部！　さ、戻っていいぞ」

「はい、ありがとうございました」

コートの外に出てきた健人に、パラパラと拍手が起こる。お前すごいな、とかマジになりすぎだろ、とか様々な声が健人を迎える。

「そんなにすごくないって。テニスだと気を抜けなくてさ……」

謙遜しながらも満更でもなさそうな笑顔が、何となく気に食わなかった。

ざわつく生徒の声を抑えるように、また先生が言う。

「それじゃあ、次！　折角全員コートの外に出たから、今のうちにサーブのお手本も見せたいんだが、高山以外でだれかできる奴いるか？」

また、ピクリと身体が反応する。健人以外っていうと、もう俺しかいない。

どこからか視線を感じて、小さく首を動かすと健人が俺の方を見ていた。手を挙げろよ、と言っているようだ。

冗談じゃない。みんなの前でなんて調子が狂うし、何より俺は健人みたいに手本になれるような腕前じゃない。手なんか挙げられるわけないだろう。俺は健人から目をそらし、膝を抱える腕の力をグッと強めた。

結局誰も手を挙げず、サーブは先生がお手本をやることになった。

その後、基本的な打ち方を口頭で説明され、数人ずつグループに分かれてラリーの練習。テニス部だからということでグループの奴らに少しだけ打ち方を教えて、だらだらとラリーをしているうちに授業が終わった。緑色のコートに緊張感が走ったのは、結局手本のラリーのときだけだった。

「ありがとうございましたー」

早くエアコンの効いた教室に戻りたいという生徒たちの意思が込められた、だらーっとした挨拶がコートに響く。みんなと一緒に校舎に向かおうと歩き出したとき、後ろから声をかけられた。

「誠」

健人だ。

「……何？」

「何じゃないだろ、なんでサーブやらなかったんだよ」

少し怒ったような口調が刺さるようだった。なんでそんなこと言われなきゃいけないんだ。

「……別に、俺じゃ手本にならないから手ぇ挙げなかっただけだよ」

「手本にならないわけないだろ。みんな初心者なんだから。お前、中学からテニスやってるじゃないか。高校入ってからやる気なさそうだとは思ってたけど、最近は酷いぞ」

もっとちゃんとしろよ、とでも言いたそうな話し方だった。上から目線に聞こえたその言い方がどうしても気に食わない。

「関係ないだろ、お前みたいにできるわけじゃないんだよ」

健人の目を見ずにそう言い返して、そしてそのまま校舎へと逃げ込んだ。健人の冷めた視線が背中に突き刺さっているのが、嫌でも分かった。

残りの授業を暗い気持ちでやり過ごして、ようやく帰り道。部活に行く気にもなれなかったから、急用が入ったと連絡を入れてズル休み。無駄になった部活バッグがやけに重い。

そういえば、健人と話すのは久しぶりだった。母さんに嫌みを言われた日から何となく気まずくて避けてたから。久々の会話で、どうしてあそこまで言われなければいけないのか分からなかった。張り合えるライバルが欲しくて発破をかけたつもりなら、相手を間違えてる。そういうのは俺みたいな下手くそじゃなくて、もっと上手いやつに言った方が効果があるだろうに。

それに、俺はやる気がないんじゃない。上達を諦めてるだけだ。中学三年間で努力してもどうしようもないってことを知ったから。それでもテニスを続けてるのは、他にできることが何もないから。新しい何かを一から始める気もなかったから。それだけだ。

健人みたいに才能があったり、紺色マントみたいに空を飛べた

りする連中にはこんな暗い気分になる経験なんていうのは少ないんだろう。俺がいくら練習したって、これ以上テニスは上手くならない。俺が手を伸ばしたって風船はつかめない。でも、あの二人は違う。……八つ当たりじみた考えだっていうのは自分でも分かっているけれど、今日の俺はいくらでも卑屈になれるらしい。そもそも紺色マントのことなんて、殆ど知らないのにそんな風に思われたらあっちも迷惑なはずだ。それでも、健人や紺色マントに対する妬みの言葉は山のように出てくる。

暗い気持ちのまま家に帰るとまだ誰も帰ってきていないようで、玄関のポストにはチラシや郵便物がいくつか挟まったままになっていた。ポストの鍵を持ってきて中身を取り出すと、戦隊ヒーローの絵が描かれた小さな封筒が一つ目にとまった。封筒の真ん中にはクレヨンで「まことにいちゃんへ」と書かれている。ヘナヘナな字、亮かな。

チラシや他の郵便物をリビングのテーブルの上に置いてさっきの封筒を開けると、同じく戦隊ヒーローの絵が描かれた便せんが出てきた。

〈まことにいちゃん、まえはフーセンとってくれてありがとう。おれいにつぎはぼくがジュースあげます。〉

罫線を無視して大きく書かれた字が可愛い。さっきまでの嫌な気分もマシになりそうだ。手紙をもらうこと自体久々だから何となく嬉しくて読み返すと、おかしなことに気が付いた。

俺が亮の風船を取ってやったことになっている。そんなわけない、俺はあの場にいただけで、何もしていない。亮の風船を取ってきたのはあの紺色マントだ。その日のことがあったから俺は最近必死で紺色マントの事を調べてるのに……。亮は風船を取ってきてもらった張本人だ。あれだけインパクトの大きかった出来事を勘違いして覚えてるなんて可能性はほぼないだろう。

バカみたいな考えだが、亮の記憶が書き替えられたとかそういうことだろうか。空飛ぶ人間がいるんだから、そういうことが起きてもおかしくないはずだ。じゃあなんで俺はしっかり覚えてるんだ？

分からないことだらけ。こんなんじゃいつまでたっても部活や授業に集中できなくなる。もう紺色マントの情報を探すより、本人にまた会って色々聞きだした方がいいかもしれない。多分、それが一番確実だ。

紺色マントがいそうな場所、来そうな場所、風船があるところ？でも子どもが持ってる風船なんてどこにでもあるしな……。

悩みながらテーブルの上に目をやると、デパートのチラシに「風船」の文字が見えた。土曜日、日曜日にみんなが大好きなヒーロ

ーたちがやって来る、風船のプレゼントもあるよ―。

＊＊＊

土曜日の朝十時半。俺は部活バッグを持って、デパート前の公園にあるイベントステージ傍のベンチに座っていた。

ヒーローショーは十一時からこのイベントステージで行われる。健人が使っていた便せんや封筒に描かれていたのと同じ、大人気のヒーローたち。想像通り、子どもとその親が大勢いる。一人くらいは、ショーの後に配られる風船を飛ばしてしまう子もいるはずだ。

ヒーローを待ち望む子どもたちの声や、ヒーローの決め台詞を子どもに強要される親の声、繰り返し流れてくるヒーロー番組のテーマソング。にぎやかな雰囲気とは逆に、俺は不安でたまらなかった。

紺色マントに、会えるだろうか。

部活をサボることが家族にばれないよう、部活バッグを持っていつもの休日練習の時間に家を出て、ショーの開始どころかデパートが開く一時間前からこのベンチで待っていたんだ。それに、朝とはいえ季節は夏、暑さは酷い。部活での暑さは慣れているが、炎天下でただじっと待っていることがあんなに辛いなんて……。

そこまでしても、紺色マントに会えるかどうかはわからない。逆に、確定するのは俺が週に二度部活を休むということ。きっと健人は、俺が逃げたとか投げ出したとかそう思うんだろうな……。

沈んだ気分のまま腕時計を見ると、十時五十八分。気づかないうちに流れている音楽も変わっている。もうそろそろだ。

『みんなー！　お待たせ！』

スピーカーから大音量で流れるヒーローたちの声に、子どもたちの大歓声が続いた。

それからの三十分、子どもたちの甲高い声が常に公園に響くのが苦痛で、俺はずっと耳をふさいでいた。数年ぶりに見る戦隊ヒーローを懐かしく感じるんだろうなと、昨日までは思っていたが、そんなことよりとにかく大勢の子どもの声が耳に辛い。楽しむ余裕もなかった。

番組のロゴが大きく飾られたステージで、ヒーローたちは次々と怪人を倒していく。一人倒すごとに子どもたちの歓声はさらに大きくなり、俺が耳をふさぎながらひたすらに早く終われ早く終われと念じ続けているうちに、ようやくショーが終わった。

『みんな、応援ありがとう！　僕たちから風船のプレゼントがあるから受け取っていってね！』

遂にこのときがやって来た！
ステージに子どもたちが群がると、数人のスタッフが大量の風船を持ってステージに現れた。お行儀よく並んで順番を待とうね、と説明があったもののショーの直後で興奮した子どもがそんなことを気にするはずもなく、列はぐちゃぐちゃ、甲高い声は止まない。それでもしっかり一人一人丁寧に風船を手渡すスタッフたちは流石だ。
そんなことを考えているうちに、三十人以上の子どもに風船が手渡された。そろそろ飛ばす子が出てきてもいいはずだ……！
そう思った矢先だった。
「あ〜〜っ！　風船……」
声の方向を見ると、子どもの多いステージ付近から少し離れたところで、赤いワンピースの女の子が涙目で空を見上げている。空には雲と間違えそうなくらい白い風船が一つ。離れてはいるが声は聞こえてくる。
「パパっ、ねえ、風船……」
女の子にパパと呼ばれた眼鏡のおっさんは、他のパパとの会話に夢中で気づいていない。
これはチャンスじゃないか……？
俺はその子に声をかけそうになるのをグッとこらえる。悲しそうな顔が胸に刺さるけど、今は待つんだ。
女の子の目にさらに涙がたまり、ついにあふれ出しそうになったときだった。
「はい、君の風船だね」
待ち望んだ声がした。学生服に紺色のマント、忘れるはずもないチグハグな服装。
声の主が女の子に向かってにっこりと笑うのが、少し離れたここからでも分かった。彼が白い風船を差し出すと、女の子はおずおずとそれを受け取る。今にも泣き出しそうだったその顔が、一気に輝いた。
「ありがとう！」
「どういたしまして、今度からは気をつけるんだよ」
また風船を飛ばしちゃったら僕が来るね、とあのときと同じようなことを言って紺色マントがふわりと浮く。俺は急いで駆け寄る。あのときは呆然と見送ってしまったが、今日はそうはいかない！
「ちょっ、ちょっと待ってくれ！」
ステージから離れた場所に俺の声が響くと、マント姿の少年は空中でピタリと止まった。
「君は……」

「少しだけ！　少しだけ話をさせてください！」
下手なナンパのような誘い文句に、紺色マントは吹き出すように笑ってゆっくりと俺の方に降りてきた。
「この間も会ったね。……覚えていてくれたんだ」
妙に嬉しそうな声だった。

＊＊＊

女の子を父親のもとに帰した後、俺と紺色マントは公園の隅のベンチに座っていた。
「声をかけてくれる人がいるなんて思わなかったよ。僕に話したい事って？」
妙に緊張して話し出せない俺を気遣ってか、紺色マントの方からそう切り出してくれた。
「いや、その、この間アンタが隣の子の風船を取ってくれたあとからアンタのことを調べ始めたんだけど……何にも分からなかったんだ。だから、直接会って話を聞きたくて……」
これだと何だかストーカーみたいだと、言いながら自分で思ってしまった。慌てて言い訳をする。
「例えばほら、何で空を飛べるのかとか、そういうことを……！空飛べる人なんて俺、初めて見たから」
とりあえず、一番に気になったことを。だが紺色マントの答えはアッサリとしたものだった。
「それは僕にも分からないなあ」
予想外な答えでもあった。
「分からないって……」
「僕、気が付いたら飛べるようになってたんだよ」
「じゃあ、学生服を着てるのは？」
「空を飛べるようになる前は普通の中学生だったから」
続けて予想外の答えが返ってくる。
「数年前まで普通の中学生だったんだ。人の役に立てたことが殆ど無くて、誰かの役に立ってみたいってずっと思っていた。そしたらある朝、僕は空を飛んでいた。どういうわけか自分の家がどこなのか―いや、それどころか名前も思い出せない。ただ、誰かの役に立ちたいってことだけ覚えていたんだ」
願いがかなった代わりに普通の生活を失った、俺にはそう聞こえた。淡々と話す紺色マントは、寂しそうにも嬉しそうにも見えた。
空を飛べる理由は本人にも分からない。これ以上経緯を聞いても無駄だろう。次の質問だ。

「じゃあさ、その、亮――この間アンタが風船を取ってあげた子！あの子がさ、あのとき風船を取ってくれたのはアンタじゃなくて俺だって言ってたんだ。それは？」
「ああ、それも分からないな。僕に会った子はみんな、僕のことを忘れちゃうみたいなんだ。二回三回風船を届けに言った子もいるけど、いつだって初めましての反応だよ」
　またアッサリとした答え。ちょっと待て、じゃあなんで俺は……。
「君の年の人に見られたのは初めてなんだ。僕は大人には姿が見えないらしいんだけど……君は子どもでも大人でもない年だからね。僕のことを覚えていてくれたのもそのせいかな」
　言われて気付く。この公園には紺色マントを見て騒ぐ大人が誰もいない。子どもからは忘れられたり、大人からは見えなかったり。しかもその理屈は本人にも分からない。ずいぶんと都合のいいヒーローだ。
「僕のことを覚えていて話しかけてくれる人なんていなかったからね。嬉しくてつい君の誘いに乗っちゃったよ」
　言葉の通り明るく笑う紺色マントとは逆に、俺は笑えていなかった。
　結局、何も分からないんじゃないか。不思議な現象が起きたというだけで、その原因や理屈は本人も知らない。不思議な現象に抗えず、ただ受け入れているだけ。俺と同じで、このヒーローだって「どうしようもないこと」の中にいるんだ。俺は、「分からない」って答えを貰うために無駄な時間を費やしたのか……。
　そこまで後悔して、もう一つだけ疑問が浮かぶ。これなら紺色マントにも答えられるはずだ。
「じゃあもう一つだけ、質問いいか？」
「どうぞ。今度こそ答えられるといいな」
「何で風船を取ってくれるんだ？」
「え？」
「だって、マントをつけたヒーローって色々出来そうじゃないか。なのに何で風船の事だけ……」
「そんなの簡単だよ。それ以外できないから」
「は？」
　思わず声が出てしまった。紺色マントは構わず続ける。
「僕は本当に空を飛べるだけで、力も弱いし他に特殊な能力もない。鍛えようとしてもダメだった。だから、ただ自分にできることをやってるだけだよ」
「……」
　最初は少しガッカリしたけどね、とバツの悪そうに紺色マントは笑う。俺が言葉を返そうとしたとき、少し遠くで子どもの泣く

声がした。
公園の出口付近の空に赤い風船が一つ、浮かんでいる。下にはそれを見上げる男の子。
「ごめんね、僕行ってくる」
ふわりと紺色マントが浮かぶ。
「……いいよ。時間取らせてごめん。行ってあげてくれ」
俺がそう返すのを聞くと、紺色マントはありがとうと言って空を飛んで行った。
この公園以外にも、風船を持った子たちはたくさんいる。これ以上紺色マントがここにいれば、その子たちが悲しむ。もう帰ろう。ベンチから立ち上がってちらりと出口付近を見ると、さっきまで泣いていた男の子が、赤い風船をしっかり握って笑っていた。
抗えず、変われず、でもその中で、自分ができることをする。
紺色マントのシンプルな答え。けれど、その答えは何の抵抗もなく俺の胸に落ちてきた。気づくことがあったから。
俺は何もしていなかったな。どうしようもないことを受け入れたまでは紺色マントと同じだけれど、そこからが違う。できることさえしなかった。ただの手本でさえ本気を出す健人が怒るのも当たり前だ。
そうだ、サーブくらいやれば良かったんだ。いや、そこからじやない。部活に集中することだってできるはずだったんだ。上達しないとか、紺色マントの事を調べるとか、自分で自分に言い訳をして、逃げていた。
不思議な現象の中にいるヒーローと平凡な日常の中にいる俺。境遇は違っても、やらなければいけないことは同じだったんだ。
自分にできることを。
見上げた空は一面の青で、雲も鳥も風船も、何もなかった。

＊＊＊

「まずは先週の続きで軽くラリーをやるぞ。後半はサーブ練習だ」
コートに響く先生の声。暑さも少しだらけた雰囲気もこの間の授業と変わらない。
「というわけでもう一度サーブのお手本をやるから、よく見ておくようにな」
そう言って先生がラケットとボールを持つと、生徒たちから気怠い声がする。みんな、先週見たからもういい、と言いたいらしい。
俺は膝を抱える腕の力を抜いて、そのまま右手を伸ばした。
「先生、俺、サーブの手本やってもいいですか」

クラスメイトが少し驚く様子が見える。その中に、健人の嬉しそうな顔があったのを俺は見逃さなかった。

○あとがき

ここまで文芸部部誌『花錦』をお読みくださり、ありがとうございます。少しでもお楽しみいただけたなら、幸いです。

昨年は文芸部が休部していたため、令和元年以来の『花錦』発行となります。今年は部員が九人に増え、とても賑やかな『花錦』になりました。活動再開の年にふさわしい内容になったと感じております。

また、新型コロナウイルスの影響で、今年の尚絅祭はオンラインでの開催となりました。それに伴い、『花錦』は初の電子書籍化に挑戦しました。紙媒体と電子書籍、両方での提供となります。編集作業を進めながら、同じ内容でも媒体が違うと感じ取るものが変わってくるように思いました。皆様はどうでしょうか？

最後に、今回の『花錦』発行にあたり協力してくださった部員の皆様、印刷や電子書籍化に協力してくださった先生方、誠にありがとうございました。

そして、この部誌を読んでくださった皆様に心より感謝申し上げます。また次回の部誌でお会いできることを願っております。

文芸部部長　川口くるみ

○奥付

『花錦』第四号

令和三年（二〇二一年）十一月発行

〈発行所〉尚絅大学文芸部

〈顧問〉武田昌憲・山本歩

〈部長〉［三年］川口くるみ

〈部員〉［三年］魚住有里・甲斐愛美・田邊ゆうこ・虎口彩音

［一年］池田麻衣・井口愛生・坂本実菜・森元李香

〈部室〉七号館一階クラブ室一

〈内容〉創作・鑑賞

〈連絡先〉〒八六二―八六七八

熊本県熊本市中央区九品寺二丁目六番七八号

尚絅大学学生会　気付　文芸部